

創立百周年記念論文集 上巻

九州大学文学部紀要・叢書・図書委員会

<https://hdl.handle.net/2324/7358022>

出版情報：2025-03-31. School of Letters, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ハリバツタ・ジャータカマーラー研究（八）

——第一六、一八、二八、三〇話の和訳——

岡 野

潔

インドの仏教詩人ハリバツタ（活動期は四世紀後半？）の作った『ジャータカマーラー』の翻訳を続けてきたが、今回は第一六、一八、二八、三〇話の四つの章の和訳を示したい。このうち第一六と一八と二八話は世界初の翻訳である。

ハリバツタの作品は、三四話あるジャータカ（本生話）が本体部分であるが、真作か疑わしい最後の第三五話の仏伝の章も加えれば、全部で三五話から成る。『哲学年報』における私の連載の一回目では、ハーン校訂の梵文に依り第一―第五話の五つの章を、第二回には第六―八と第一―話の四つの章を訳した。また第三回では第一―一四、一九、二〇話の四つの章を、第四回では第二二、二四、二六、三三話の四つの章を訳した。その次からは新たに出版されたシュトラウベ校訂の梵文に依り、第五回では第二三、二七、三四話の三つの章を、第六回では長大な第二五話の一つの章を、第七回では第九、二一、二九、三一、三三話の五つの章を訳した。これらに今回の四つの話を加えると、私がこれまで和訳し得たのは全部で三〇話となる。

私がこの翻訳にあたって自分で立てた原則は二つあり、その一つは、高校・大学での教育教材に使えるように、直訳体を避けて、専門家ではない多くの人に読みやすい文体での和訳を心がけるということであり、もう一つは、サンスクリット語（梵語）のテキストの中に欠損があつても、チベット語訳（蔵訳）からその欠けた箇所を補つて訳し、話の全体の形を示そうということであつた。しかし今回和訳を示す第一八話においてだけは、残念ながらその二番目の原則を守ることができなかった。第一八話プリヤビンダは八三の詩節を含む長い章で、梵文が欠けた部分があまりに大きい。その欠損箇所を全部埋めるための蔵訳からの和訳を締切までに作ることは難しく、諦めざるを得なかった。重要な第六六詩節以降の部分のみを訳した。

今回私が和訳する章は実にどれも梵文の欠損が著しいものばかりである。梵文写本の欠損状況を少し説明すれば、第一六話のカーシスンダラ仙は、章の冒頭で梵文の少しの欠損があり、その後は梵文があるが（ $\text{८}+\text{८}$ ）、その後は章の最後まで梵文の欠損（ $\text{८}+\text{८}$ ）が続く。第一八話のプリヤビンダ王は、梵文がその章の最後（ $\text{८}+\text{८}$ ）にしか存在しない。第二八話の名探偵バダカも、梵文がその章の最後（ $\text{८}+\text{८}$ ）にしか存在しない。第三〇話の鏡面王は、章の開始部で梵文が欠け、中間部（ $\text{८}+\text{८}$ ）のみ梵文が存在し、その後章末まで（ $\text{८}+\text{८}$ ）梵文が欠ける。

この和訳では、前回もそうしたように、文頭や段落の初めにアステリスク（*）を付けた箇所が、梵文の欠損のため、私が蔵訳から補つて訳した所である（一〇）。

私は計八回続いたこの訳の連載において、梵文の欠損がない章から翻訳を行つてゆく方針を立てたため、連載の最終回にはこのように梵文の欠損が大きい章ばかりを訳すことになった。しかし第三五話の仏伝を除いて、この八年間（連載の八回分）で、少なくとも梵文が部分的にでも現在存在しているハリバッタのジャータカの章すべ

てに和訳を作り、発表しえたことは、振り返ると、何やら不思議な因や縁に導かれた結果であって、運に恵まれた仕事であったように思う。翻訳をしたというより、させていただいた、という感じである。ともあれこうして大多数の章の翻訳が済めば、次の研究段階として、諸学者はハリバッタの作品全体を論じ、またアーリヤシューラやゴーパッタなどのチャンプー体カーヴィヤの他の仏教詩人たちとの比較に進むことが可能になる。

第三五話の釈尊の仏伝『サルヴァールタシッタ・ジャータカ』(Savārthasiddhantakā)については、そのテクストを内包するネパール伝承本である『シャーキャシンハ・ジャータカ』という作品（第三五話への付加増広が作品の後半でなされた本）の梵文が、すでに外蘭幸一(1983)によって日本語に訳されている⁽²⁾。この外蘭訳はハーン校訂の（当時出版準備中の）梵文をベースにして、蔵訳と東大写本一本をも参照したものである。このように外蘭博士によつてまずハリバッタの第三五話を半分ほど内に含む仏伝作品が訳され、その後私に合計三〇のジャータカの話が訳したので、ハリバッタの全三五話のうち、日本語訳が全くなされないで残っている話はあと四つだけとなった。それらの四つの話はどれも、梵文が全く存在しない、全部蔵訳だけから訳さねばならない章である⁽³⁾。

今回和訳を発表する四つの話の内容について、以下に順次解説したい。

第一六話のカーシスンダラ (Kāsīśundara) 仙の話は、「戒の波羅蜜」（完全なる戒）に属する話の一つである。菩薩たるカーシスンダラは国王の息子として生まれながら、若くして自ら苦行林に赴き、出家生活を送る。出家者とはいえ美貌の青年であったので、キンナリーの娘が彼に近づいてその若さと美しさを讃え、彼に苦行者の戒を捨てて女と楽しむよう、説得を試みる。しかし彼は美しい誘惑者たるその娘に對して、若さが無常であつて、必ず老いと死が到来すること、また苦行林での隱遁生活が世俗の生活より安樂なものであることを説いて、彼女を納

得させる。またこの過去話の最後に、ジャータカの基本形に従い、現在世（釈尊の時代）に起きた事件の話も示される。その事件では釈尊の教化によって青蓮（クヴァラー）という見事な踊り手である女が若さの驕りを捨て、他の舞踏家の女たちと共に彼女は出家した。その青蓮こそが過去世におけるかのキンナリーの娘であった。

次に第一八話のプリアピンダ（Priyapinda）王の話は「忍辱の波羅蜜」（完全なる忍辱）に属しており、菩薩の忍辱（瞋恚の念を起こさず忍び堪えること）を説くべき話なのであるが、しかし本章で菩薩たる主人公が示す忍辱は、良い為政者が当然もつべき徳性というべきもので、驚くような性質のものではない。それは『忍辱仙人』の話が示すような自我を極限まで制する苦行的な行為としての忍辱ではなく、すべての王が持つべき美德としての忍辱であって、そこには「戦争を可能な限り回避するための忍辱」も含まれる。

この話の主題は王によって引き起こされてしまう戦争である。作者は恐らくこの話で、戦争の悲惨を回避するために諸王は好戦的な態度を捨てて相互に我慢・忍辱を示すべきであるということを説きたいのであろう⁽⁴⁾。この話はガンガーディパティヤという王都にいるメール王から始まる。メール王はある外出の時に、北方から様々な家畜を連れてやって来た旅の商人たちと会い、北の国がヴァジュラダンダ（*Ido the ddyug pa can*）という偉大な王の統治のもとで繁栄していることを聞いて怒りを抱き、対抗心を抱いてその国に戦争をしかける。しかし戦況は思わしくなく、メール王は大臣たちから説得されて敗北を認め、講和を申し入れざるを得なくなる。講和の後、メール王は自分の大事な愛する娘を戦勝国のヴァジュラダンダ王に花嫁として差し出した。その結婚によって生まれたのが菩薩（釈尊の前世）たるプリアピンダである。本章は八三詩節から成るが、主人公プリアピンダが世に誕生して話に登場するのはなんと第六〇詩節を過ぎてからである。つまり章の構成上、本来は話の重心が忍辱で名高い菩薩の活躍に置かれるべきにも関わらず、菩薩の誕生の前にある二つの国の開戦・戦闘・戦争の終結の有

様を作者ハリバッタが第四九詩節までずっと芸術的に詳細に表現することあまりに熱心になった結果、章の語りが全体的に戦争描写に偏りすぎてしまった印象を受ける。王家の出身らしい作者は戦争の文学表現に強い関心があったのであろう。戦争の終結後、やがて菩薩が大人になり、父のヴァジュラダンダ王が亡くなった後に王位を継いで北の国王になった時、再び両国の間に戦争の危機が訪れる。長年メール王が心の奥底に抱き続けてきた敗戦の屈辱感、ならびにプリヤピンダ王の治める国にいて若い王を倒して権力を握りたいと願うドウルマティという邪悪な大臣の策謀により、ついにメール王は復讐戦を決意し、自分の孫にあたるプリヤピンダの国に対して宣戦布告をするに至る。平和を願う菩薩は自国にメール軍が攻め込むことを回避するため、やむなく軍をガンガー川まで出動させ、その後彼はうまく戦闘の開始を止めることに成功して話が終結するのであるが、実はその戦争の回避をもたらした最大の要因は、プリヤピンダ王がメール王に示した忍辱の態度というより、菩薩たるその王が有する或る別の不思議な特殊能力、すなわちベーリー鼓の音によって天の食物や飲物を生じさせる力のおかげであった。つまり本話は菩薩の忍辱を強調しつつも、戦争の回避は王の忍辱という美德だけでは実現しえなかったことになるので、その点でこの戦争と平和をめぐる物語は、忍辱の大切さを教える話としてはやや説得力に欠けると言わざるをえない。私は今回この章の第六六詩節以降のみの部分を翻訳した。菩薩の誕生以後に進む本話の最重要な部分が、章全体の最後の四分の一にあって、その部分だけは幸運にも梵文がほぼ存在しているので、少なくともその部分だけはこの連載最後の機会に訳しておきたかったからである。菩薩の誕生以前にあった長い戦争の描写部分の訳が欠けてしまったが、それでも、本話の筋はほぼ理解できるはずである。参考のため、本論文の翻訳の末尾に本話のパラレルであるクシェーメーンドラの作品の第百三章のテクストの和訳も載せた。

次に第二八話のパダカ (Padaka) の話は、名探偵の如く犯罪に明敏な知性を発揮する美しい青年（もしくは中高生

くらの年の少年)のバダカが主人公となり、都での盗難事件の解決のために王のもとで犯罪調査に働くという話なので、分類上「智慧の波羅蜜」(完全なる智慧)に属している。この話はまず、菩薩たるバダカの異常な出自を語るため、父たる婆羅門と母たるキンナリーの出会いの出来事から始まる。この両親の異類婚から生まれた少年であるバダカはその頭脳により盗人が残した足跡(バダ)などの現場の痕跡の観察によってたちまち犯人を見出すことが出来たことから、バダカと呼ばれた。彼は父を長年閉じ込めていた母の洞窟を去って、父と一緒にヴァーラーナシーの王宮に行き、父から王に紹介されて、王都の数々の盗難を解決するために活動を開始した。悪人の王宮付き司祭が嫉妬を覚えるほどバダカは立派に犯人検挙に活躍し、王の信頼を得るが、やがて一つの盗難事件をめぐって彼に大きな試練が与えられる。それは厄介な、或る意味で最も扱いが難しい事件であって、王が犯した罪を明らかにし、王自身が犯人であることをその王の前で彼は語らねばならなかった。その事件は実は盗難捜査に有能すぎるバダカが盗人たちの仲間だったのではないかと疑う司祭の疑いを晴らす目的もあって王がバダカの捜査力を試そうとわざと仕組んだものであった。バダカは最初は王の立場を慮ってか、犯人が王であることを様々な喩えを用いてまわりくどく示すが、あくまで王がとほけるので、最後にははっきりと言わざるをえなくなる。この喩えが面白い。そして王宮の家来たちが笑う中で彼は王座の下から盗品を掘りだして事件を解決してみせ、試練をやりとげた彼は王から褒美をもらう。話はバダカの王宮での説法で終わる。このように法を説くパートがハリバッタのどの章にも必ず入って教えを詩で示すのは、作者がこの『ジャータカマラー』という法話たるべき作品を単なる仏教説話の集成にしたくなかったからであろう。

第三〇話の鏡面王(Āḍaśamukha、アードルシャムカ)の話は、「智慧の波羅蜜」に属し、驚くべき智慧を発揮する王としての活動が菩薩の前生話として語られる。話は国王になるための資格テストにあたり、王子の鏡面(菩薩)が

示した智慧のエピソードから始まる。五番目の王子であつた鏡面は、父王の遺言に従つて王になる資格として王子たち全員に課せられた四つの条件をクリアした後、隠された宝の位置をめぐる謎の詩の意味を説き明かすことで、彼の勝れた王の資質と知性を示し、めでたく国王に即位する。その後大きく場面が変わって、話は哀れでおかしなキャラクターである婆羅門ダンディカ（Dandika）を中心にしてコミカルな調子で進行する。この人物は次々に事件に巻き込まれ、意図せずして様々なトラブルの原因となつてしまふ。彼は王への告訴を欲する怒つた人々たち（牛を失つた婆羅門・馬を失つた馬飼・手斧を失つた大工・嬰兒を失つた母親）によつて縛られて、無理やり鏡面王のもとへ連れられてゆく。その王宮への旅の途中でダンディカは様々な人や生き物から鏡面王への伝言を頼まれるが、それらの伝言はそれぞれ奇妙な事の謎の解明を王に求めるものであつた。一行が王宮にたどり着くと、鏡面王の裁きの場面となる。ダンディカは多くの罪で告訴されるが、彼を憐れむ王はそれらの告発をすべて退け、ダンディカを無罪放免とする。さらに王はダンディカが伝言として他の者たちから依頼されてきた謎を一つ一つ智慧をもつて解き明かした後、その一つの謎が指し示す隠れた宝のありかをダンディカに教えてやり、彼を貧乏から解放して幸せにした。ハリバッタのこの章については重要な古いパラレル文献が三つあり、話の部分ごとに四つの文献の間で細かな比較が可能である。その比較の作業を通して、Hahn (1973) が示したようにハリバッタが彼の種本となつた聖典テキストをどのように大胆に変えながら独自の創作を行つたかが、ある程度見えてくる。

この三月で私は退職を迎えるため、『哲学年報』上の翻訳の連載もこれが最後となる。私という研究者の限られた力を最大限に発揮させるために人文科学研究院が常に提供してくれた最高の研究環境にたいし、感謝の念に堪えない。二〇年以上にわたつて毎年この年報に拙稿を掲載させてもらへたことは誠に恵まれたことであつた。今年で設立百周年を

迎える歴史ある文学部で日々講義ができたことは私にとって大きな勉強の励みであった。九大インド哲学史講座の初代教授で日本のインド仏教説話学の土台を作りアーリヤシュラ作『ジャータカマラー』の全文和訳などを成し遂げた干潟龍祥先生と、ドイツでの恩師ミヒヤエル・ハーン先生は、私が九大印哲の学部・大学院で営むべき学問の目標であり続けた。——文学部百周年、おめでとうございます。

第一六話 カーシスンダラ仙ジャータカ⁽⁵⁾

* 戒に専心し、命が断たれても「持律の」決意を守る性質をもつ者たちは、天女たちの戯れによっても心の堅固さをゆるめることはありません。(二六・二)

◇ 次の様に伝え聞いています。——王都ヴァーラーナシーで、あらゆる徳性を有するブラフマダッタ王に、菩薩(釈尊の前世)であるカーシスンダラという名の息子が生まれました。その偉大な心の方(菩薩)は、他の生において集積した智慧によって正法どおりの修戒を心がけ、青春の始まりにおいても、魅惑的な容姿をもつ女たちとの官能的な領域での不品行に陥ることはありませんでした。

* 彼は王権というものが、他の人たちにおいて、災いや偽善、貪瞋痴、「物や人への」執著、驕りと尊大さ、また我執に依ること、寂滅(の道)と違うこと、善い世界(善趣)への門を閉ざし悪い世界(惡趣)への墜落を得ること、「(生に)疲れを生じさせること、『知足』(自足)を失わせること(へと導くもの)」と認識し、また、(a)寂滅の最高の因たる『無明の滅』がある、(b)積みつつある種々の徳性による歓びがある⁽⁶⁾、(c)世の人々に母の如く安らぎを与えるものである、出家(という生き方)について思いをめぐらせ、安樂さに恵まれていても副王たる

地位をうち捨てて、感官の群を「統制し」鎮めて、まるで頼れる友「に依るか」のように『知足』に依って、苦行者としての出家生活に住し、

山の基部のように堅固な心をもつ彼は、山林の中に鹿や孔雀やチャコーラ鳥の群に満ちている中庭のある、草葺きの庵を建てると、黒羚羊の皮を纏って、(a)人の群(苦行者たち)を聖者の道に導く、(b)心の寂靜のため「内なる」平静さを作る、苦行を行いました。(二六・二)

上へと昇りゆく『禪定』という階段の連続によって、(a)『心』という門番に「その所在を」遠くから教えてもらった、(b)『迷妄』という闇を滅して浄らかな、(c)心地よき『五神通』という棲家へと彼は登り着きました。(二六・三)

◇ さてその偉大な心の方(菩薩)はある時、禪定から立ちあがると、果実や根葉を採るためにその草庵から出て、道々後ろについてくる鹿に伴われながら、まるで風に揺れている枝という手をもつ沢山の果実を実らせた樹々から「手招きで」招かれているかのように、白い砂州にサーラサ鶴たちや番いのチャクラヴァーカ鳥たちの休んでいる月の光のように浄らかな水を湛えた小川をいくつも眺めながら、海のように深い心をもつ人として、快さが自然に感じられてくる山林の内部空間の中をずっと歩いてゆきました。

あちこちを彼が遊歩していると、(a)平岩の上に坐っている、(b)熟した椰子の実に似た乳房をもつ、(c)雲が消散した浄らかな三日月の姿に似て黄金のかげらを思わせるほっそりした体をした、(d)珊瑚のように唇が赤く、(e)蓮の花弁に似た大きな目をした、(f)若枝で作った耳輪をつけている、(g)細い彎曲した眉毛の線をもつ、(h)蕾(という指)の優美な蓮のような手をした、(i)蓮華座を離れた女神シュリーの如き、(j)芳香ある花々に充たされた豊かな髪をもつ、(k)まるで山の森林の内部空間すべてを美と化しつつある、(l)水晶の如き無垢の白い齒の燦めく光

という花糸に飾られた一輪の睡蓮の如き容をもつ、(m) 天から落ちてきたアプサラス（天女）のようである、一人のキンナリー（妖精的な種族の女）が、その彼（の姿）を見ました。「見て」その彼の容貌の美しさに心惹きつけられた彼女は、「まずは行ってみよう。仙人の息子であるあなたの方に強く憧れていても、何か他の口実を使って、少し会話をしてみよう」と考えると、彼の近くにやって来ました。

低く甘い調子の心をうつとりさせる歌声をもつて、獣たちの耳すら引き寄せる声を響かせ、

また蜜蜂（マルハナバチ）の群が下に降りてくると驚いて目をくるくる動転させたりしながら、胴が細くて華奢な体をした彼女は、顔をやや上のほうに向けて、新芽のある林の樹々の枝を引き寄せては、ゆつくりとその花々を集めていました。（二六・四）

彼の前に立つと、(a) ほっそりした体の線もち、(b) 「胸当ての」ドゥクーラ布がずり落ちるのを両の乳房がくい止めている、その女は、頬笑みが飾った美しい顔で少し会釈してみせ、甘い嬌態を仄かに示しました。

（二六・五）

眉毛という「よく動く」踊り子が作る美によって甚だ魅力的な顔をもちながらも、心中に起こった「愛の」焰で心が一杯になっているそのキンナリーは、彼の愛欲を慎む心の前では「彼を誘う」少しの機会も得られませんでした。稲妻も、雲の無い空においては、起こる機会が少しも得られないように。（二六・六）

(a) 額が巻毛によって飾られており、(b) 目に魅力があつて愛らしい、(c) 顔をうつむかせている、(d) 綺麗な歯をした、(e) ほっそりした体をもつ彼女を、愛欲を克服しているかの牟尼は、蔑むこともなく、見つめていました。（二六・七）

唇をふるわせ、悶えるかのような荒い呼吸を懸命になす彼女は、羞恥をもつて何かの言葉を言おうとして、

爪先で蓮の葉を裂きながら、まるで風に打たれた蔓のように、深くお辞儀しました。〔二六・八〕

◇ 菩薩のもとに来て最初に丁寧な挨拶の言葉をした後に、こう言いました。「偉大な仙人様、有益な忠告を得たいとの願いから私は少しお話ししたいのです。もし妨げでなければ、お聞き下さい。」——菩薩は答えました。「安心してお話し下さい。」

キンナリーは言いました。「あなたが持ちこの、この愛神（カーマ神）の姿をも越える美しさ、——この、点々とまばらにアンジャン粉のような青黒い髭がうつすら出て暗い色合いを得た両頬の、満月をも恥じ入らせるほどに美しいお顔——ニヤグローダ（バンヤン樹）のやや熟した果実の形をしている唇があり、青い蓮華に似た目がある、この、新しいジャスミン花や月や雪のように「真っ白い」齒列という、葯に飾られた睡蓮を思わせるお顔、——そしてまた、この、(a)『青春』という造形家が日々増強させてきた輝かしい「肉体」美があり、(b)睡蓮の花蕊のように色白で、(c)アショーカ樹の若枝のように華奢で優美な手足があり、(d)とても広い胸をもち、(e)あたかも「あなたを」愛しむ『美』（の女神）に抱きしめられているかのような、あらゆる人の心を魅する、愛神が依る器である、お体は、「あなたのこの居場所と」なんと似つかわしくないことでしょうか——「あなたがお住みになっている」(a)老人たちが住むにふさわしい、(b)どこかで採り集められてきた、もともと口に合わない、がさがした根菜や果実の食糧しかない、(c)固いクシャ草の針のために歩くのが辛い土地であり、(d)歩行困難な山の斜面もあり、(e)おびただしい猛獣の声が恐ろしい、この、森の奥の住処と。

かの天女（アプサラス）たちも、もしあなたのこの愛神の容姿をも越える「美しい」お体を見たなら、神々への強い興味を失って、高い志をおもちのあなたの方に、熱い関心を置くことでしょう。〔二六・九〕

苦行者の娘たちも、もしこうして、青春の美しさをもつあなたを眺めたなら、愛神の放った矢に心を射貫か

れて、苦行にちつとも熱が入らないと思います。(二六・一〇)

とても大きな眼をおもちの、あなたのこの、月の如くに心を奪うお顔を見なかったなら、一人の若い女の体が、弓を引き絞る愛の神により、簍れさせられることもないでしょうに。(二六・一二)

雲を脱した月の如き、あなたのこの皎々と輝く美をもつお顔に視線を留めたなら、雌鹿たちですら、きつと目を不動のまま留めることでしよう、ああ鹿の目をもつ方よ。(二六・一二)

あなたの手はしずかに女の顔を仰向けにさせて「その額の上の」ティラカ(額飾り)をいつまでもずっと描いてあげるのに向いています。なのに、その上品な手をどうしてあなたは沢山の薪を運ぶためにお使いになっているのですか。(二六・一三)

花開いたばかりの新鮮なカルニカーラ花(モミジバウラジロ)のように白い、あなたのこのお体は、宝石で出来た煌びやかな装飾品と最上等の衣裳にふさわしいのに、どうしてごわごわした襤褸布・黒羚羊の毛皮・木の皮の衣を纏っているのでしょうか。(二六・一四)

新鮮な睡蓮たちの間をさまよう一匹の蜜蜂のように、あなたのこの目の視線は愛する女たちの顔の間をさまよっているのが最もふさわしいのです。天与の美貌をお持ちの方よ。決して沢山の猛獣が棲む森林の間ではありません。(二六・一五)

富を望まぬ心もち、苦行者の誓戒により「自らの」願望をお縛りになって、あなたが出てしまわれた宮殿は、あらゆる享樂をなす人々に満ちていても、灯明が吹き消えてしまった家のように、もう輝くことはないでしょう。(二六・一六)



これ以上の多言は無用ですね。私には親友であるキンナラの若い娘がおります。そのひとの前では容姿を誇

りにする天界の女たちでさえ「あまりの美しさに」恥じ入るほどです。そのひとは、山の森林の内部空間を彷徨い歩いているあなたを眺めてから、何かしら異常な状態になってしまい、日々、体は青白く瘡せてゆき、吐く熱い溜息で唇を熱しながら、花々を撒き散らした心地よいベッドの中にも睡眠を得ることができません。『夜』の女神のお顔の額飾りである月を嫌っています。春の季節に、満開となったマンゴーの花々の枝と接触して黄褐色に染まった風が吹く園林の中においても、心染しめずにいます。軽くて冷たい、月輪のように白い、幾重もの蓮根の繊維の腕輪をつけたままのそのひとを、女友達（付き人）の衆も、どうしても心慰めることが出来ません。彼女は恥じらって目を伏せたまま、石榴樹の花に形が似た足の親指の先で線を地の土の上に描きながら、誰もいない場所にいる時、「私に」恋に落ちた出来事を話して聞かせ、「友よ、これが私の今の状態なのです」と、そう言って、萎れたチャンパカ（金厚朴）の花環のように青白く瘡せた、その四肢「の有様」を示し、そして私をあなたのもとに派遣したのです。

そこで、たとえあなたが女性と逢うことをお避けになつておられていても、どうか憐愍のお心に依り、愛の焰に焼かれている私の友の心を鎮火して、その心に安らぎを与えてあげて下さい。（二六・一七）

長い間あらゆる芸に磨きをかけた美しい女たちとともに楽しむ快樂、それこそが森に住む苦行者たちをもつ苦行の果なのではないでしょうか——そう私には思われるのです。（二六・一八）

◇ すると菩薩は彼女自身が「秘かに」いなくその願いを認識し、*語りました^⑧。

*「ご婦人、まずは教えて下さい。そのキンナリーは年齢においてあなたより勝っているのですか、或いはそうではないのですか。」——彼女は答えました。「彼女は私よりも年齢が勝っています。」^⑨——菩薩は言いました。「もしそうなら、それによって、他ならぬあなたにおいて今まさに私が見ている肉体とは別のよう」（その女性を）

見るのです。」

* 先にはあなたの言葉は甘美なものとして生じたのですが、今は同じその「言葉」がひどく苦い響きをもちます。今はあなたから最初にそれが出た時のような甚だ快いものではないのです。〔二六・一九〕

* 新鮮な花は心を奪いますが、完熟を得た同じその花は美しくありません。瞬時に絶えず変わりゆく物事において、一体全体、何が恒常不変のめでたさをもつものとして現れうるのでしょうか。〔二六・二〇〕

* 月初に至った月がもつ、か細い姿は心に適うものです。しかし同じ月を、ほかの日になると多くの者はそうは思いません。「新しい」と判断された奇麗なものは、すべての生き物にとって、魅力的なものに見えるのです。〔二六・二一〕

◇ * また、ご婦人よ、青春期にいくらか入ったあなた自身の上において、(a) 髪の毛は「やがて」白くなり、(b) 心を奪うその容貌の美しさは衰え、(c) 眼・眉間のすべての部分にたるみが生じ、(d) 歯には隙間があいて、(e) 動作はひどく不安定となり、(f) 絶え間なく思考が言葉と合致しなくなり、(g) 諸の感覚器官の門（目や耳など）が閉じ塞がれてゆく、(h) あたかも隙をねらうピシャーチー（病をもたらし鬼女）の如くに「生き物の体を」苦しめる、老いというものを、来ていないのに来ているように「思い描いて」見る時、その「年嵩の」キンナリーにおいては、まして、言うまでもありません。

* あなたの若い時期は過ぎつつあるのです。しばし、心を集中して聞きなさい。

「たとえ、死者の」体がそれぞれの部所から血を滴らせ始めて、厚く凝固した血に覆われる時、心を有する者の誰が、人々の心を魅了し欲望を生じた快樂（の行為）に対して、嫌悪の心を生じないでしょうか。二

* ここにある、髪・骨があり管・腱で繋がっている一体のばらけた女の骨が、身体の構成部分ではないかのように見る「誤った」認識から、迷妄の思考をもつ者は、快樂への思いにより、迷いである「体への」愛著に至るのです。（二六・二三）

* また、快樂によって人々と繋がっているから、別離の苦が人々を襲うのです。「すべての」苦は、原因の集起から成り立つ性質のものです。それ故に、欲望をいだいて「異性を」思うべきではないのです。（二六・二四）
* あたかも、一匹の羅刹の恐ろしい姿が地面から姿を現した時に「それを」産出した者がまさにその「羅刹」に対して恐怖するのと同じ様に、これら世の人々も、自ら作った業（行為）である多くの苦しみに襲われて恐怖します。（二六・二五）

◇ * 三界を苦しめるこの『三つの苦』（老病死）が生じる中であっても、これらの世の人々がもし穢れなく暮らすなら、一切の中で最も勝れた自性と誕生をもつ、そんな勝れた神として「天に」生じるでしょう。（二六・二六）
* さらに、ご婦人よ、あなたは「先ほど」こう提案されました——『恐ろしい蛇や多くの獣たちにとっての棲家である森を捨てて、あなたは「愛する女たちの間で」眺めを楽しむことをなすべきだ』と¹⁰。どうかこの「考え」を聞きなさい。

* とても大きな幸福を生じさせる故に、寂靜の心をもつ者（苦行者）たちの「住む」森を眺める時、(a) アルジュナ樹の花房による芳香があり、(b) 象たちの「香ばしい」マダ液が付いた稠林をもつ山や、（二六・二七）
* とても速く流れる小川や、森のさまざまな地に、幸福感を味わっている牟尼たちの心にとつては、どうして「これら地上の」快い美しい土地も、神々の「味わう天での」大きな幸福感のようでないことがあるでしょうか。（二六・二八）

* 世俗的な生を有し家住をなす人々は、他者に「生活の資を」請い求めることの憂悩と苦しみをもちます。しかし苦行林に住し、『知足』（自足）という宝を有する者たちにおいては、〔二六・二九〕

* 人にものを請い求めねばならない怖れによる苦悩を、誰も得ていないし、「未来に」得ることもないし、過去に得たこともないのです。あなたは次の点を見てとるべきです。

* もし蜜蜂たちが「象のこめかみの」マダ液を欲することが無いなら、「彼らは」象によって耳の先で払い落とされることもないでしょう。「わずかな」幸せのかけらを得るために他者に従属すること、それは『悪い生存』の原因を生じるだけなのです。〔二六・三〇〕

* 女たちを伴ってひたすら喉の渇きの如く鎮まることがない渴愛の中に暮らしている悪い人々が『怒り』の弓をもって発する『罵倒』の矢も、もう決して、「森に棲む」彼らを傷つけることはありません。〔二六・三一〕

◇ * このように苦行者がもつこれらの功德（利点）を知って、あなたが青春の驕りを退けることは、自らこれら感官をよく制御するために、大事なことではありませんか」と、そう言いました。

* すると菩薩が教示した『法』という水の灌頂により、愛の火を鎮めた彼女は、「ああすばらしい。よくお説きになりました」と言って、偉大な心の方（菩薩）を深く拝礼しながら、或る一つの地に去って、彼から教えられた禪定の方法を開始しました。

* その後、菩薩は自分の木葉の庵に入り、燃える薪で火を祀り、静かにゆっくり美味の果実の食事を取ってから、四禪に心を繋ぎ止めました。〔二六・三三〕

◇ * かくして、天女にも似たそのキンナリーは、菩薩を恋い慕ったものの、心の落ちつきを得て、「あの方は誓戒を破らなかつたのだ」と考え、戒律のゆえに「彼に」恭敬をなすべきであると「考えました」。男性との様々な

享樂も戒律を妨げる原因であり、それ故、それらに愛著しないことが善いと「思いました」。

◇〔現在世物語〕 *さて〔王舎城で〕青蓮(クヴァラヤー)という舞台劇の踊り手である女が、〔他の〕踊り子たちと一緒に、竹林〔精舎〕にいらつしやる仏・世尊(釈尊)のもとで、「わざと」踊りと歌を演じてみせた時、世尊は彼らに古い「の姿」をお示しになり、「彼女らがもつ」若さの驕りを明らかにし、その後、彼らを阿羅漢果へと導き入れました。「その時」世尊は比丘たちの前で、この前生話の教え(キンナリーの話)を説かれたのです¹¹⁾。〔それによれば〕この青蓮という名の彼女が〔過去世に〕かのキンナリーの娘だったのです¹²⁾。

* (a) 薄明に似た「色合いをした」、(b) 細い体には快い、(c) 踝まで垂れた法衣を着けた、(d) 落ちついて大地の如き自性をもつ、(e) 美しい睫毛のある、(f) 耳の近くまでのびる「大きな」眼をした「彼女は」、人々から誉め讃えられながら、『明瞭な言葉』という花をお与えになる導師たる、寂靜の三昧に住している仏がお坐りになった、美しい踊り子たちの場所に入りました。(二六・三三)

* 比丘尼の衣を纏った者として、青蓮というこの女性が出家したので、「それを見て」残りの舞踏家の女たちは、「〔同じ〕」その衣を纏った者として出家しました。(二六・三四)

* リーダー「たる青蓮」に従った、比丘尼の衣が美しい、残りの舞踏家の娘たちは「こうして」感官の寂靜へと入りました。(二六・三五)

〔章を閉じる祈願の言葉〕¹³⁾

* 誓願の力によってこれら、私たちすべての者が、求める法に近づけたのです。どうか私たちが輪廻的生存を断ち切るための幸運を与えられますように。(二六・三六)

『カーシスンダラ〔仙〕ジャータカ』、『第二部類の』第六話〔終わる〕。

第一八話 プリヤピンダ王ジャータカ¹⁴

* 感官に苦しめられる〔官能的〕領域の快樂から退くことを欲する、年老いた王（ヴァジュラダナ）は、学び聞く性質をもち、戒に習熟した、彼の息子（菩薩、釈尊の前世）に〔即位の〕灌頂を行ってから、神の住所（天界）に去りました。（二八・六六）

◇ * 〔或る時〕菩薩が、父から受け継いだ正法の王国を統治しながら、「私の王宮において、神の食物や衣や装飾品、何でもが〔欲する通りに〕出現すればよいのに」と思考すると、その途端すぐに彼の欲するものすべてが現れ出しました。

* 彼は親しい者（プリヤ）たちにもピンダ（施食のお握り）を捧げて敬意を示すことを悦ぶので、それ故、プリヤピンダという、彼に適した名前が世の人々に広く知られるようになりました。

* また、彼の神力によつて、ベーリー鼓（鍋形太鼓）の音の連続が聞こえた〔範圍の〕彼の領土に住む者たちの家々に、欲した通りの神の食物が出現しました。

* さて「プリヤピンダの臣下の」ドウルマティという名の悪しき大臣は、生まれつきの悪辣な心から、このように考えました。「なんとかして、あのプリヤピンダを策略によつて、閻魔の家（冥府）に導かねばならぬ。そうすればこの〔国の〕人々は私の支配を受けるものとなるう。」

* 敵愾心によつて考えたり話したり諸行為をなす者たちは、自性を墮落させてしまうものです。それ故そ

の敵愾心を、毒蛇の如くに、愚か者たちがいる山に捨て去らねばなりません。（作者の感想）（二八・六七）

◇ * その後邪悪な自性をもつドウルマティはメール「王」に手紙を送り、次のように伝えました。「あのプリアピンダはあなたの敵〔であった国王〕の息子であり、それ故、あの者を策略か武勇によって殺すなら、ジャンプ洲（閻浮提）全部を閣下が統治できるでしょう¹⁵。私も「いざとなれば」閣下の側につくつもりです。」

すると邪悪な大臣「の手紙」によって勇気づけられたメールは、プリアピンダに使者を送りました。その使者はプリアピンダのもとにやって来ると、メールからの伝言をこのように告げました。

「あなたの父が来て、この私の民は財を奪われ、悲悩を味わったのだ。今や、私の大軍勢による破壊をあなたも同じ様に耐え忍ぶがよい。」（二八・六八）

◇ その時プリアピンダは使者の言葉を聞き、「考えました」。「もしメール「の軍」がここに来るなら、この私の民は、彼らの戦象たちに園林を食い荒らされてしまうし、残忍な兵たちによって財産を奪われるだろう。また戦闘となれば、鋭い武器によって夥しい人と象馬たちが殺されてゆき、大変不幸な状況に陥ってしまう。

それ故この今が、行動を起こすべき時だ。」そう熟慮すると、その使者に言いました。「私が軍を伴って、敬すべき方々（メールの軍）のもとに行かねばなりません。それ故、私が自ら出向いて行くと伝えてほしい。」

その使者は「そうします」と答えると、戻って、メールにプリアピンダからの伝言を話しました。

その後 (a) まるで世界終末の風の力によってかき乱された海が立てるかのような深く重々しい音響を立てる、(b) あたり四方の空間を雄象らのマダの匂いで薫らせている、(c) 太陽光によってきらきら燦めく鎧と投槍の尖端の輝きをもつ、(d) 風に躍り翻る色とりどりの旗やのぼりが美しい、巨大な軍隊に取りまかれながら菩薩は「南下して」ガンガー河の岸まで達すると、「大臣」ドウルマティに次のように語りました。「行つて、わが母方の祖父（メー

ル王)にこう伝えなさい。

『私の』グル(精神の師)よりも大事な親族であるやさしい性質のあなたと、自性淨らかな私との戦争に、いったい何の意味があるのでしようか』と。」「二八・六九」

◇ するとかの悪人ドウルマティは、来て門衛に用件を伝え、入場を許され、座を与えられると、人のいない所でこっそり「次の様な」嘘の言葉を伝えることによって、メールを憤激させました。「大王様、プリヤピンダからの伝言をお聞き下さい。」「拝聴しよう」とメールが答えると、ドウルマティはこう言いました。「破滅へ向かう思考をもつ、未熟なる精神のプリヤピンダは次の如く、閣下に語ります。すなわち、

『ライオンのように高い矜持をもつ私が、ただちにガンガー川の「向こうの」岸辺に到着した時、あなたがもし諸方を見渡したなら、あなたはどのようにして怯える一匹の羚羊のように身を震わせながら「その場に」立ち尽くさないでいられましょうか』と。」「二八・七〇」

◇ 「どうしてこのような傲慢な伝言をプリヤピンダは私に送ってきたのか」とメール王は思い、ますます激しく怒りの焰で心が燃え上がりました。激怒しているメールを見て、更にドウルマティは言いました。「閣下、プリヤピンダはあなた様に対してわずかな無礼もなすべきではないのです。なぜなら、

力ある者を不意に攻撃したとしても、弱者は必ず滅ぶものです。一匹の蛾は薪によつて燃える、燦めく炎のある火の中に、自らの破滅に向かって落ちてゆくのです。」「二八・七一」

◇ 鎧をつけた象や馬や戦車や歩兵たちに囲まれて、戦争を強く欲するメールは、プリヤピンダの軍司令部(王の所在地)の近くへと布陣しました。プリヤピンダは、神々がもつ飛行船(ヴィマーナ)に形が似た、權を漕ぐことで勢いよく推進する大きな船に乗り、皆が誉め歌う称讃の声を受けながら、勝れた親しい人々に圍繞され、ガン

ガ―川の水波の戯れを克服して「ついに対岸に」上陸すると、沐浴し香を塗って、食事の時間に「神の食物を出現させるため」ベリーー鼓（鍋形太鼓）を打ち鳴らさせました。

どこまでも諸方の空間を満たしながら遙か遠くまで鳴り響き続けるそのベリーー鼓の音は、突然出現した雨雲の雷音によく似ていて、不気味に思うメールの耳をも満たしました。（二八・七二）

◇ 当惑したメールはドウルマティに尋ねました。「あのプリヤピンダは今、何をなさうと欲しているのか。」——ドウルマティは答えました。「プリヤピンダは今、ベリーー鼓の音によって天の食物や飲物を生じさせ、部下たちと共に食べようと欲しているのです。」

メールは言いました。「じつに彼がこんな福德の威力を有している以上、その彼はひよつとすると私やまわりの家来たちの上に燃え輝く稲妻を落とすかもしれない。だがしかし、あの私の娘の息子（プリヤピンダ）はいつも忍辱（堪忍）に慣れ親しんでいるから、きっと私のことを思い遣ってくれるに違いない。ああ全く、

お前が私をこのように偉大な王と戦わせようとしていたとは、——お前のドウルマティという名前は、正真正銘の『悪意をもつ者』という立場で、その名の通りだ。」（二八・七三）

◇ さてプリヤピンダは密偵たちを通じて、メールが不安に陥っていることを知ると、うまく方便をもって彼を受け容れてあげようと考え、秘密の工作員たちにより、そちらの「陣の」場所で次のように噂を流させました。

「プリヤピンダはこう語っているらしい」——『もしあなたが迷妄により、私と講和を結ばないならば、その時私は忍辱を捨て、怒りに縛られた心で、(a)火の輝きによって諸方角の隅々まで照らす、(b)重く轟く雷音をもつ、稲妻をあなたの上に落とす』と。（二八・七四）

◇ メールはその報せを得ると、プリヤピンダと講和を結びました。プリヤピンダはその王を自分の居留する家

に連れてきて、正しくしきたり通りに高い敬意を示しました。するとメールは次のようにプリヤピンダを何度も大いに誉め讃えました。「立派だ、愛しい子よ、

善良な人たちは自分の徳性を隠そうとし、人々の前に置かれて敬われても、本当に恥ずかしがるものだ。しかしそれでも、私は人々の前で、あなたを誉め讃えたいのだ。私の心は深い情感をもつて、あなたに強く惹きつけられる。」(二八・七五)

あなたがもつ徳性の証拠を見知った故に、私は慕わしさの思いから、つい饒舌になる。満開のマンゴー樹の花房を見た時、どうして蜜蜂が黙っておとなしくしていられるだろうか。(二八・七六)

おお、あなたが有する、宝石や装飾品を思わせる『徳性』(「の光輝」)は、海にいたるまで、「空のあらゆる」『方角』の女神たちを飾り立てるものだ。また、あなたの『名声』という「輝かしい」ドゥクーラ布を身に纏ったこの大地は、自らの美によって、天を笑うかのようだ。(二八・七七)

生き物たちにおいて、あなたがもつ徳性は、大きさと浄らかさにおいて、他の者たちももつ徳性をはるかに超えている。それは、湖沼のほんのわずかな高まった波たちを、乳海における盛り上がった大きな波がはるかに超えるようなものだ。(二八・七八)

生き物たちにおける『悪しき見解』という闇を打ち払い、『正法』という光の円を広げながら、自分の聡明さによって『高い理性をもつ者たち』という夜咲きの白蓮たちを開花させる、智慧から出来た月が昇った——それがあなただ。(二八・七九)

「賢者たちが集う」会堂に坐った人々は、最高の知者であるあなたが「そこに」居ない時、その会堂を真つ暗であると思うだろう。徳性によって輝かしいあなたが居る時、火がランプに灯されたかのように、会堂はと

ても眩しく輝く。〔二八・八〇〕

自らの輝かしさによつて「あなたは」満月をすら羞恥させ、それを大地のあらゆる蓮池の中に潜らせてしまふ。また、あなたがもつ名声は、ハンサ鳥（コブハクチョウ）の群に似て、無限の岸辺を越えゆき、遍く飛びゆくものだ。〔二八・八二〕

日長石と月長石は、太陽および月の光〔に曝された〕結果として、それぞれ火と水とを生じる。原因とプロセスなくして、結果が生じることはない。しかしあなたはその両者をうち捨てて、他者〔救済〕のために努力している。〔二八・八二〕

◇ 私には、かくの如き、神の如き威神力をもつ、宝石のような孫（娘の息子、プリヤピンダ）が生れているのだから、私にこれ以上望むものは無い。」

菩薩は、本性として残忍な心をもつドウルマテイのその邪悪な性を「とがめず」容赦しました。

いつも確たる心をもつ彼（菩薩）は、盛大な歓待をもつてメールを敬い、また「祖父の国の」人々を正しい道に導き入れてから、風に打たれる白樺の樹々がある雪の山を越えて、「北方の」ジャスミンのように白い自らの都城へと去りました。〔二八・八三〕

◇ — さあ、このようにかの世尊が菩薩であつた時に、悩害がなされようと忍辱（堪忍）の心を弱めることがなかつたことに思いを巡らせて、あなた方は忍辱の修習によつて、自己を浄化すべきです。

『プリヤピンダ〔王〕ジャータカ』、〔第二部類の〕第八話〔終わる〕。

第二八話 足跡を追う人パダカ⁽¹⁶⁾

* 鋭い智慧によつて「謎に」驚くことなく、世の人々のために役立ち続けている、最高の真実の追求において果敢なる心をもつ者たちに、いったい誰が驚きを生じないでしょうか。(二八・二)

◇ 次の様に伝え聞いています。―王としての徳性すべてを具備したブラフマダッタ王が「自身の輝きで」飾るヴァーラーナシーの王宮に、真夜中の明月を思わせる、ヴェーダ聖典の学に習熟した或る一人の婆羅門がいました。家住者たちを護りながら、火の供養を一心になす彼は、世のあらゆる人々から供養を受けつつ、家住生活を営んでいました。

* 或る時、彼は葉草のために、(a) 沢山の鹿の群に満ち、(b) とても密生した樹々の暗がりがあり、(c) 水辺の樹々の沢山の根が「水流に」振り動かされ揺れているとてもきれいな川がある、山の林の奥に入つてゆきました。

* 治療困難な重い病気を断つための葉草の荷物を担いで、川の近くにある或る大岩の平らな面の上にあがつて、疲れを癒していると、(a)「肌が」新鮮なカルニカラの花のように白く、(b)動かない蜜蜂の群のように黒い髪房を「紐で」結んでいる、(c)蓮の花びらに「形が」似た目をもつ、(d)金色の芭蕉の髄のようなきれいでふつくらした二本の太腿をもつ、(e)若さの初期に重たくなった乳房の荷によつて細身の体が苦しげな、(f)ウエストがほっそりした、(g)まるで山や森を美しく飾るために業（カルマ）という鍛冶工が「姿を」作つたかのである、一人のキンナリー（妖精的なキンナラ族の娘）を見ました。彼は彼女の美しい姿にひどく心が奪われましたが、なんとか本心に返りました。

* 彼から目を離せなくなり、「荒い」呼吸によって顫れ出た齒が美しいそのキンナリーは、わななく心で、隙を知る愛神の矢のために苦しみました。（二八・二）

* 心と耳に歓びを与える歌声によって鹿たちになら思慕を生じさせるその女性は、花々をゆつくり採り集めながら、かの婆羅門のそばにやって来ました。（二八・三）

* 耳に接するほどの「大きな」目をした、月の瑞相の絵のような、見目うるわしい彼女を見て、生き物の心を迷乱させる愛神の「恋の」矢の標的に彼はなつてしまいました。（二八・四）

* すると彼女は恐怖に満ちて「急に」枝を投げ捨て、手をひどく震わせながら彼に頼みました⁽¹⁷⁾——「婆羅門の長よ、どうか「視線を妨げて」目を悩ますこれらの蜜蜂から、恐ろしさでいっぱい私をお守り下さい⁽¹⁸⁾。」（二八・五）

* そこで彼はすぐに立ち上がると、月のような顔、雌鹿の目のように大きな目をもつ彼女に言いました。「あなたの目を悩ます蜜蜂を私が防ぎます。芭蕉のような腿を有するひとよ、怖がらないでこれらの花を集めなさい。」（二八・六）

◇ * こう言くと、

* 彼は彼女の顔に向かってくる蜜蜂を追い払い続けました。そのキンナリーは花々を集め終わってから言いました。「これらの蜜蜂からあなた様（聖子）は私を守って下さいました。助けて下さった方には、必ずお礼すべきです。」（二八・七）

◇ * ですので、聖者よ、どうかいらして下さい。私の家においてになって、休息し、その場所に適した食物をお食べになられて、ご自身の住まいにお帰りになって下さい」と言いました。彼は「そうしましょうか」と同意

して、そのキンナリーと一緒に行きました。その後そのキンナリーは入口の門を塞いでいる大岩を取り除けると、「聖者よ、この石洞へお入り下さい」と言いました。其処に入ると、石洞の門を再び「その大岩で」遮蔽しました。

＊その後、其処で羞恥のために顔を伏せ、乳房を両手で覆い隠しながら、彼女は微笑むと、甘美な言葉で語りかけ、愛の熱望の思いにより、まるで天界の遊び女のように「彼と」戯れました。(二八・八)

＊愛神によつて彼と一緒に心が射貫かれた、見事な「臍の上部にある」三条のしわの線によつて美しい腹部をもつ彼女によつて、その婆羅門は熱愛する心の幸せを味わいながら、夜を瞬時のように思いました。(二八・九)

◇ ＊その後「石の洞窟で一緒に住み始めた」或る時、そのキンナリーの胎内に菩薩（釈尊の前世）が生まれました。時の経過の後、あらゆる善相に飾られ、自身の体から発する光によつて眩しく輝きながら、彼はまるで神の子のように、彼女から生まれ出ました。

＊生まれて八年経つと、彼は父のもとで沢山の論書を理解するようになりました。星々の計算でも全くすらすらと説明できる力（弁才）が彼に生じました。

＊その後彼は母に伴われてその「洞窟の」外に出ると、知り得る知識の残りを悉く学び知るため牟尼（聖者）たちに近づき仕え、そして彼らからも知識をすべて学んで理解すると「洞窟に戻り」、近づいて父に言いました。「父上、足跡の按排「を見ること」によつてさえ私は盗人を知りえるのです。」――父は尋ねました。「盗人の足跡において、「そこから」さらにどのように知りえるのか、言つてごらん。」――彼は答えました。

＊「恐れ的心をもつ「犯人」の足跡をよく理解すると、足指を激しく動かしたことによつてついに「足指が」

土だらけになります。全く「土に」まみれた状態になることで、均等な歩行が失われます。（歩む）素早さの故に、ステップの前部（足先）にダメージを受けています。」（二八・二〇）

* 大変な知性をもつ彼は「残された」足跡（パダ）の按排から盗人を認識する知を生じさせたので、それ故、パダカという名で世に知られるようになりました。（二八・二二）

◇ * その後或る時、かの偉大な心の方（菩薩）は、花や果実や根菜を運んで来るために母が「洞窟の外に」去った間に、父に尋ねました。「もともと「父上が」お生まれになった土地は¹⁹ここなのですか。それとも他のどこにあるのですか。」——婆羅門は答えました。「息子よ。ヴァーラーナシーという王様の宮殿がある地、そこが私の生まれた場所だ。」——パダカは言いました。

* 「父上、もしここ（洞窟）に住みながら、生まれた土地を恋しく思うのでしたら、どうして私と一緒に今すぐ行かないのですか。賢者らの集會場で様々な論書が解説され明らかにされる言葉を聴きたいので、私にとっても興味がとてもあるのです。」（二八・二三）

◇ * 婆羅門は答えました。「息子よ、「出口の」ここにある、とても重い大岩を取り除けるための力がもしお前にあるなら、年若き人よ、その時「われらは今」外に出てゆくことが出来よう。」——するとパダカはその大岩を無造作に取り除けてしまい、父と一緒にヴァーラーナシーに行きました。

* そのパダカの手を握ったまま、その婆羅門は「王宮の」門の番人たちによって押しのけられながら外に立っている多くの人たちの中に包まれ「立って」いました。近くにいる仔象や雌象たちの背にいた属国の王たちが「王宮に」入りゆきました。呼ばれて、急いで進みゆく使者が入りました。近くにある門では空になった馬たちが口から吐いた唾液の泡が地面の上に雫していました。王の謁見の時を待ち望む、白い服を着て掌の上に花々をかざ

した召使たちが、また坐る敷物を持つ再生族の人々（婆羅門など）が、門を見つめていました。

* 左肩に剣を載せている歩兵隊が一隅にずらりと立ち並ぶ、「謁見の」会堂での集合の時になったので、ブラフマダッタ王の王宮の召使たちを眺めながら、「彼ら親子は」門衛に訊ね聞いた後、中に入りました。「父の婆羅門は」獅子座に坐る王に向かって勝利・祝福の言葉を述べるため、前に進み出て、こう言いました。

* 「王様、パダカというこの私の息子は、盗人を足跡（パダ）から知りうる者でございます。もし民のためにお使いになれば、「彼らを」守るのに役立ちます。それ故、あなた様はどうかこの者をご忍受下さいますように。」（二八・一三）

◇ するとかの王は、パダカを眺めて驚嘆の思いをもって言いました。

* 「この者は、黄金をうち消すほどに〔輝かしい〕光をそなえた姿をもち、その胸はライオンのように広い。爪はすべらかで光沢あり、顔容〔の美〕は月を超えるほどだ。髪は蜜蜂のように黒く、両目は大きく輝きをもつ。これらのことから判断すると、この者が持つ知性もそうでないことがあろうか。」（二八・一四）

◇ * そのようにかの王はおっしゃって、パダカを大変歓迎しました。すると菩薩（パダカ）は「お願いを」言いました。

* 「王様、もし私が教示した〔犯人〕が、或る家に住む、恐れに満ちた眼をもつ者であった時は、どうかその人をあなた様は殺さないでやって下さい。」（二八・一五）

◇ * 「そうしよう」という王の言葉を聞いて、パダカは王宮に来るようになりました。このような大きな知恵をもつそのパダカが居る地域では盗人たちは他人の財物を奪い取ることをやめたため、彼は「彼らを」巡視するなどの方法をもって仕事を営みました。

* 鉄が中に仕込まれていない門をもつ、人々が幸せに眠りに落ちている家々の財産が盗み去られた時は、彼は夜中に屋敷の中に立ちました。（二八・二六）

◇ * さて或る時、ブラフマダッタ王は上等の馬車に乗り、随身の者たちを伴って、馬上にいるプローヒタ（宮廷祭僧）と一緒に話しながら「お出かけになり」、(a)昇った時の三日月のように姿がとても美しい取り巻きの女たちと園林で過ごす、(b)酩酊した、(c)とても喜んでいる人たちがいる自分の都（の様子）をご覧になりながら、その外に出てゆきました。

* すると或る場所で、(a)肩のあたりや、おさげを結んで花をつけた髪房から（離れ落ちてしまつて）まるで門楼（トーラナ）から離れ落ちた屋根飾りを思わせる、(b)服布のへりの一箇所で衣服とゆるく結んであるだけの、真珠の首飾りを持つ、バドラーという名の高級遊女が、強い酔いのために眠り込んでしまつてゐるのを〔王は〕眺めて、プローヒタに言いました。「聖者（プローヒタ）は〔この機会に〕、偉大な知性をもつパダカの能力をご覧になるべきでしょう。」

* 明らかに酩酊のため、深い眠りが生じているこの女においては、「衣と」結んであるけれども「結びが」ゆるい真珠の首飾りを、誰か或る人が解き外して奪つてしまふことでしょうか。（二八・二七）

◇ * すると邪悪な性質をもつそのプローヒタは、本性から奸詐の心をもち、菩薩の徳性が喧伝されることに我慢ならなかったので、こう言いました。「パダカが悪党たることを閣下はご存知でないのです。それ故、あの者がそのような諸徳性の偉大な性質をもつとお語りになるのです。」——王は尋ねました。「では彼の悪徳とはいかなるものか。」——プローヒタは答えました。

* 「あのパダカは自分が狡猾な盗人であるので、夜中に家々で財を奪う者たちを、閣下のもとで明らかにして

いるのです。」(二八・一八)

◇ *そこでかの王は、「ではこのように私が〔自ら〕行為すれば、聖者よ、あなたはバダカが偉大な性質の持ち主であると信じる事が出来るでしょう」と、そう言つて、車から降りました。そして彼は自らその高級遊女からその真珠の首飾りを取り去つて、三度〔都を〕右回りにぐるぐる回つてから、自分の宮殿があるヴァーラーナシーに戻り来て、まさに獅子座（王座）がある場所で地面を掘つて、〔それを〕置きました。

*その後、その高級遊女は酔いが切れて、意識を取り戻し、眠りからすつかり醒めると、衣のふちを見ました。「ああ何てこと、誰かが私の真珠のネックレスを盗つてしまった！」そう考えると〔すぐ王宮に〕やつて来て、王の所に進み出ました。

*「王様、誰かが、眠りに陥つていた私の衣のゆるんだ結び目をほどいて、重たいペンダントの宝石が付いた、月光のように〔眩しい〕真珠のネックレスを盗んだのです。」(二八・一九)

◇ *するとかの王は、プローヒタの見ている前で、バダカを呼んで、命じました。「このバドラーがもつ高価な真珠の首飾りが、何者かによつて奪われた。それ故、盗人を〔調べて〕告げなさい。」

*そこでバダカは外に出ました。〔現場の〕足跡の按排をよく観察し、都を三度、ぐるぐると右回りに回つてから、王の宮殿に入つてきて、獅子座の下をよく観察し、幾度も繰り返し王の顔を見て、その偉大な知性の者は頻笑みしました。

*王は言いました。「その笑いは何故か。さあ言いなさい。」——バダカは答えました。「閣下、私が見るところ、このバドラーの真珠の首飾りを奪つたその盗人は、卑しい人物ではありませんね。」——王は言いました。「では言いなさい。」——バダカは答えました。「閣下はどうか喩えを一つお聞きになつて下さい。」

* 大地を維持するお方よ（王様）、或る所で、壺作りを生業とする人が、険しい斜面の土を一側面から掘っていましたが、やり方を大きくしたことから、その地を崩れさせてしまいました。その地に「埋もれて」彼は体が圧迫され、苦しみに苛まれて、その刹那、この言葉を叫びました。（二八・二〇）

* 『この地（土、大地）のおかげで、大きな樹々が生じ、また生き物たちに享受されるため穀物も生じるのだ。『それなのに』まさにその地が「自ら」今日、私の体を押し潰してしまふなら、この世界でどうして私が幸せを得られるだろう』と。（二八・二二）

◇ * 「パダカは」こう言つて、沈黙しました。するとその王はパダカに言いました。「さあ、はつきり言いなさい。」— パダカは答えました。「もしこの「喩えの」後でも、閣下がもつとはつきり答えられることを望まれるのでしたら、では、別の喩えを語りましょう。

* 火を供養する、或る名高い再生族（婆羅門）がいました。儀軌どおりに火を供養しているのに、彼はその焰によつて手を焼かれてしまい、火が全身に燃え広がったため、この言葉を叫びました。（二八・二三）

* 『私はこの火を毎日供物で供養してきた。敬信の心をもつて礼拝してきた。それなのに、他ならぬこの火が私を焼くなら、生き物たちにとって一体何が依り処となりえるというのか』と。（二八・二四）

◇ * これだけ言つと、パダカは再び沈黙しました。王は言いました。「私にはあなたのその言葉がよく理解できない。だから、もつとはつきりした意味となるよう、語りなさい。」— パダカは答えました。「偉大な王よ、もつとはつきりさせるため、別の「言葉」をも望まれるのでしたら、ではお聞き下さい。

* 「或る一人の婆羅門が沐浴をするため川の水に入りましたが、押し流されてしまい、次のように叫びました。『水は生き物を生かしてくれるものであるのに、それによつて私は苦しみ、流されてゆく。では一体、何者に

わが依り処を求めたらよいのか』と。」(二八・二四)

◇ *このように言つて、パダカは再び沈黙しました。そこでその王は再び彼に言いました。「偉大な婆羅門よ、とてもはつきり分かるように言いなさい。」——パダカは答えました。「もしそうでしたら、閣下はどうかお聞きになつて下さい。」

*或る森に鳥たちが長い間、色々な樹木の種子を食べながら棲んでいました。それなのに、他ならぬその森から生じた、激しい勢いをもつた赤々と照らす火によつて、毎晩彼らは猛烈に焼かれたのです。(二八・二五)

*深い森のおかげで、鳥たちは木蔭を得ることができたのです。それなのに、他ならぬその森から火が生じたなら、彼らは一体どこに依り処を求めたらよいのでしょうか。」(二八・二六)

◇ *王は言いました。「さあ、言葉の意味をはつきり分かるよう、あなたは言いなさい。」——パダカは答えました。「では大王様、とてもはつきり分かる喩えをお聞き下さい。」

*穀物の生育を願う或る一人の農夫が、欲びをもつて軛を握り、犁で畑を耕していました。(二八・二七)

*すると親を敬い、いつも熱心で、若くて大きな眼をもつ彼の娘が、ご飯を持つて、急いで畑の地にやつて来ました。(二八・二八)

*彼の指図どおりにご飯の容器を置いた時、「彼女の」腰帯から腰布がほどけ外れて、落ちました。(二八・二九)

*その彼は裸の彼女を見ると、農村民の心から生じた、善悪の判断をなくした激しい欲望の思いをもちました。(二八・三〇)

*その時彼女は羞恥と恐怖のあまり、目に涙を浮かべ、手を震わせ、視線をさ迷わせたのです。愛神による法の生類への勝利が訪れた時⁽²⁰⁾、彼女は惨めな姿となつて、苦しみました。(二八・三一)

＊力ずくのやり方で、してはならないことを苦しむ娘にしてみまい、彼は後悔を生じ、苦しみで焼かれて、「このように」言いました。「わが娘よ、すべきでない事をこのようになす私に対して、どうしてお前は今日、抵抗しなかったのか。」（二八・三三）

＊羞恥しながらその娘は父に言いました（²¹）。

『父よ、苦しむ私が頼れるのは、あなたしかいないのです。あなたによってこの大きな不品行が生じるのであれば、私は今や一体、ほかのいかなる者に救いを求めればよいのでしょうか』と。（二八・三三）

まさに主たる者の所から大きな災いが生じくる場合、その「下にいる」人々に、どうしてすばらしい幸せが生じえるでしょうか。（二八・三四）

もし燦めき輝く光をもつ灯明が自ら、黒闇を作り出しているのであれば、灯光ある家を願う者たちは一体どこに灯光を求めたらよいのでしょうか。」（二八・三五）

◇ このように言って、かの偉大な方（菩薩）は沈黙しました。王は言いました。「あなたはこれまで「あれこれ」説明してくれたが、一体何のことか、私にはわからない。」——パダカは言いました。「もし大王様が他の喩例を示すことによって言うておりますことがお分かりにならないのでしたら、ではきっぱり明白に申し上げます。

他ならぬあなた様が、あのプローヒタ殿も見ているところで、誰の目にも若い女とわかる、園林の奥で眠っていたご婦人から、真珠の首飾りをお奪いになったのでしょうか。」（二八・三六）

◇ 王は言いました。「では、私によってそれはどこに置かれたのか。」——パダカは答えました。「そう訊かれるのでしたら、では、この獅子座をどうか離れて下さい。」「王が」獅子座を離れると、

その後、笑う家来たちに見つめられながら、彼（パダカ）はその地面を掘り返して、眠る白い蛇のようなどて

も美しい真珠の首飾りを掴み出しました。(二八・三七)

その場で王と家臣たちは、最高の真実から常に離れない知性をもつ彼の判断に驚かされました。一方、悪人たる性質によって汚された心もち、善良な人々を嘲っているかのプローヒタは、激怒しました。(二八・三八・三九)

なぜなら、世の人々から高く称えられる徳性ある人たちがもつ勝れた性質の完璧さに、羨望に覆われた心をもつ悪人たちは、全く我慢できないからです。(二八・三九)

◇

かの遊女はその真珠の首飾りを受け取ると、心から歓喜して自分の家に帰ってゆきました。

菩薩は座席に坐ると、王と家来たちに対して、次のように正道への導きとなる説法をしました。

「これら世の人々がもつその幸せの達成は、いつも禍に伴われながら来るものです。祝福は、毒蛇がもつ猛毒と共に生まれるかのようなです。(二八・四〇)

快樂を望んで、利益のため、してはならぬことをする者たちは、「同時に」地獄の火が生じさせる大きな苦しみを見ていないのです。(二八・四一)

『心』という蟻塚に潜んでいる『願望』という雌の毒蛇は、官能的な領域に盲目的に沈んでいる落ちつきのない人々に対し、致命的弱点を探しては噛みついていきます。しかし「その蛇は」『内的寂靜』の快い安らかさのおかげで『知足』(自足)という「蛇除けの」呪文を得ている人を遠く避けるのです。(二八・四二)

「生活の」はじめさの故に「享樂を得たい」との心をもつ者は、過勞を無視して、他の人に仕えて働きます。しかし斧の刃のような、苦を生じさせる「他者への」『奉仕』は、「働き手の」誰をも苦しめずにおくでしうか。もし人が永続する完全な幸せを欲するなら、『知足』に依るべきです。そうすれば、『願望』という火はもはや『知足』に安住した心を焼くことはありません。」(二八・四三)

◇ その時の王は「実にそうだ、よく説いた」と言つて菩薩を称讃し、大きな敬意をもつて供養し、自分の住まいを寄進しました。

パダカは父から許可を得て、夫と息子との別離に苦しむ〔母の〕キンナリーをいたわつて喜ばせ、連れて来ると、或る地で〔終生〕幸せを得ました⁽²²⁾。

『パダカ・ジャータカ』、『第三部類の』第八話〔終わる〕。

第三〇話 鏡面王ジャータカ⁽²³⁾

* 窮状の中にいる他者を救い出す、その方（菩薩）がお持ちの智慧はいつも成果があり、その〔助けられた〕人々は、他者からの様々な災禍に因つて悩苦することがなくなります。〔三〇・一〕

◇ 次の様に伝え聞いています。――王都ヴァーラーナシーで、ブラフマダッタ王が天に逝かれると、その後まもなく大臣たちは多くの都民たちを呼び、次のように告げました。「王様の〔遺された〕言葉をお聞きなさい⁽²⁴⁾。

* それはかくの如くです。私の五人の息子のうち、或る者が〔これらの事を〕なしうるなら、すなわち、（一）〔その者が〕空中に位置している獅子座を掴まえること、（二）王冠が自ら頭頂に載ること、（三）手で持たれてない白傘が浮動することなくその頭上に立つこと、（四）〔後宮の〕女たちが〔彼を出迎えるために〕面前で立ち上がること、（五）その者が正しい意味のとおり、次の詩を説明できること――

* 『外と内にある宝、外でも内でもない宝、蓮たちに覆われた水に〔ある宝〕、樹と石たちの根元に〔ある

宝』⁽²⁰⁾。〔三〇・一一〕

◇ * 「それら五事をなした」その者に「王位の」灌頂を与えるべきである、と「王は」お語りになったのです。」

* すると都民たちは「王様がお命じになったお言葉は法規同然であり、その通りに達成されるべきです」と申し上げました。その後、それらの課題が順々に与えられると、四人の「年上の」王子たちにおいては、求めに答えられないことがわかりました。鏡面（アーダルシャムカ、鏡おもての如き「輝かしき」顔色をもつ者）という名の、末の五番目の王子は、菩薩（釈尊の前世）でしたが、

* (a) ライオンの如き勇猛さをそなえ、(b) 真実の誓いの力をもち、(c) 「その座に」登らんと願い、(d) 『不善』という敵を「心から」消し去っている、その彼は、虚空に出現して「浮かんで」いる獅子座を、地面より掴まえました。〔三〇・一二〕

* 「次に」彼に(a) 黄金の柄のある、(b) 真珠や宝石の鈴が付いた、(c) 満月の影像の如き煌びやかな日傘も「出現し」、頭上でひとりでに停止しました。〔三〇・四〕

* 「その後」(a) プローヒタ（宮廷祭僧）が彼の前で捧げ持った、(b) ちらちらと絶えず燦めく、(c) 諸宝石の放つ光に薄膜のように包まれた、(d) 『曉山』（東の地平にある山）にある「夜明けの」太陽の姿に似た、王冠が自ら「彼の」頭頂に載りました。〔三〇・五〕

* またその後、あたかも「朝の太陽を見て」蓮たちが起き上がるように、知性の光の輝きによって闇を追いやるその太陽の如き菩薩を見て、王付きの女たちが「座から」立ち上がって示した、笑いで美しい容は、まるで蓮池で目覚めた蓮の花たちのようで、とてもきれいに輝きました。〔三〇・六〕

◇ 次に、かの大臣たちはその「謎の」詩を持ち出して、言いました。「王子様、今、この詩の意味を分かるように説明なさって下さい。」するとかの菩薩は復唱してから、こう語りました。「隠された宝（伏藏）が、この宮殿の〔敷居の〕内側に、またその外側に、またその中間（敷居の真下）に、また侍女衆のための浴池に、また王の侍者のマンゴー樹の下に、また獅子座の下にあるなら、それでこの詩の意味が明白となるはずだ。」そこでかの大臣たちはそのすべての場所から諸々の宝を次々に掘り出しました。

* かくして、都城において民衆が大臣たちと共に歓喜する中を、菩薩は正式に灌頂を受け、国を統べる地位に立ちました。〔三〇・七〕

* 王がその地で国を正しく治めるさまは、天界で神々の王（インドラ）がなすのと同様でした。福德に依って資産が増大したので、世の人々は幸福を得て、長くいつまでも歓びました。〔三〇・八〕

* 王がその統治において「悪徳の」汚れを離れているなら、それによって民はますます繁栄するものです。あたかも雲から離れて「薄暗く」濁らされていない太陽の下で、美と繁栄の女神が蓮の群落に宿るように。〔三〇・九〕

◇ さて、その国にダンディカという名の婆羅門が住んでいました⁽²⁶⁾。彼は(a)絶えず貧乏の苦しみに陥っていたために「悩んで」心乱れ、(b)仔象の頭の毛のようなばさばさに乱れた髪と髭を生やし、(c)ひどく大きな体格をしていたため木造りの食糧庫のような外見を有し、(d)かつかと燃える胃袋の火のため「空腹を」耐え忍ぶことが困難であり、(e)小蛇たちが這い進むが如き曲がりくねった血管の網⁽²⁷⁾に覆われている不格好な形の太い脛をもち、(f)仔象の額の隆起部によく似た膝頭をもち、(g)ビルヴァ（ジュノリンゴ）の実のかたちの腫瘍が足にあり、(h)もう片方の足は「皮膚病で」老人の舌のようにざらざらに荒れてひび割れており、(i)牛のしっぽと目を思わせる

醜い目をし、(j) あちこち欠けた隙間がある黒い歯をもち、(k) 至る所にブツブツ黒斑がある太い鼻柱をもち、(l) ひどく荒れた滑らかでない指の爪をもち、(m) 福德に欠けているため自分の家人たちすら嫌悪を生じさせており、(n) 物乞いに行く時にいつも卑しい人々が「侮蔑的に」ぴくりと動かす『眉毛』の弓によって放たれる『不敬』という毒を塗った『拒絶』の矢たちを阻止しようともせず、(o) 貧窮の苦しみのあまりに心に鎧をつけるのをやめた彼は、

・眉をぴくりと動かす卑しい者たちにものを請い求めることを恐れたりしませんでした、まるで蛇たちに対して恐れを感じないように。「彼は」彼らによって『何でも知る者』と呼ばれました。渴望（というものを知る）学問は、「その」毒に対する薬だからです。（三〇・一〇）

◇ ・「ある時」彼は同類の婆羅門から二頭の牛を借りて、耕作の仕事をしました。その後その二頭の牛が犁の労働ですっかり疲労したため、「犁を」外してやり、彼は畑のへりで眠ってしまいました。すると其処で寝ている間に二頭の牛はいなくなっていました。彼はゆるゆると「力なく」立ち上がり、「ああ困った、二頭の牛が盗人たちに盗られた」と思い悩みながら、森じゆうをくまなく歩き回っていると、なんとか二頭の牛を見つけることが出来たので、かのバラモンに手渡ししました。するとその婆羅門は彼にこう言いました。「今日はお前さんの家に繋いで、私のこの二頭の牛に草を与えてやれ。翌朝、私は家に連れ帰ることにしよう。」彼は「そうします」と承知しましたが、その後、その二頭の牛たちは森へと逃げ出ていってしまい、彼は「その間」再び眠気の支配に陥っていました。その二頭はまた先と同様に行方知らずとなりました。「それを知って」かの婆羅門はダンディカの所に来て言いました。「二頭の牛を返せ。」ダンディカは答えました。

・「昨日」行った時に丁重にあなたに『この老いた二頭の牛を（この）家で受け渡します』と私は言いまし

たよ。過失ある〔あなたの〕せいです。その時どうして〔そこで〕受け取らなかったのですか。どうして今日になってあれらをあなたに渡せるでしょうか。」〔三〇・一二〕

◇ * 婆羅門は言いました。「ダンディカよ。お互いに異なったことを言い合う、こんな争いを誰が分かるだろうか。子供のようなこの言い争いが何の役に立とうか。もうやめよう。鏡面王（アーダルシャムカ）の御前に訴え出るため、我らは行かねばならない。」

* そう言うと、彼は無理やり引つ張っていきました。* 彼らが次第に進み行くと、一人の馬飼が森の中で馬たちを引き連れていましたが、一匹の馬が道を外れ、別の方へと駆け去ってしまいました。そこで馬飼はダンディカに呼びかけました。「今、道を失ったその忌々しい馬を止めてくれ！」²⁸ そこでダンディカは馬を止めようとして、石を投げました。

その馬が、馬たちの蹄の音が喧しく響く街道を捨てて去りつつあった時、彼が投げた石のため、その馬のすねは折れてしまいました。〔三〇・一二〕

その馬飼は、憂えるダンディカを、懲罰をくれてやるに価する者として、首に縄を縛りつけ、何度も棒で打ちすると、こう言いました。〔三〇・一三〕

「あの馬のすねを砕いておいて、お前は今どこに立ち去るつもりだ。さあ、裁いてもらうため、今から王宮に行こう。」〔三〇・一四〕

◇ 彼ら二人（婆羅門と馬飼）に引き立てられてゆく途中で、ダンディカは(a)対岸から川の中程まで〔水を〕渡り来た、(b)頭の上に大きな包みを載せ、(c)手斧を歯でくわえている一人の大工を見ると、こう呼びかけました。

「おい棟梁、川の深みに進みゆく時は、しっかりと手斧を歯でくわえておけ。それはそのうち落ちるかも知れ

ぬ。頭が足りぬお前さんに、私はその事を忠告する。」(三〇・一五)
 するとその大工は、怒りが生じさせた、眉の吊りあがった物凄顔で、彼に答えました。

「まずは自分をこそ戒めろ、大変利口な人よ。なぜおれに対して無意味に教え諭す。あんたはおれの師ではない。」(三〇・一六)

激怒で心が煮えくりかえったその大工がそう叫んだ途端、あつという間にその口から手斧は川の水の中に落ちてゆきました。(三〇・一七)

するとその大工はその川を渡ってきて、怒りのあまりダンディカを掴まえると、縄でその首を固く縛り、こう言いました。(三〇・一八)

「もし、この喉元まで達する川をおれが渡りつつある時、あんたが教え諭したりしなかったなら、それに返事しようと言った口から、おれの手斧が水へ落ちることがなかったはずだ。」(三〇・一九)

さあ、よく切れる刃先をもつあの手斧を、この水から引き上げて、おれに返してくれ。もしあんたが水に潜れないというなら、それでは、来い！おれたち二人は王宮に行く。」(三〇・二〇)

◇ それでダンディカはその大工に引つ張らながら、ひどく怯えて歩き始めました。しだいに夏の太陽光によってひどく体が苦しめられたその「一行の」すべての者たちは、(a)密生するパラシヤ樹(ハナモツヤクノキ)の陰に坐っている牛たちの群がいる、(b)近くの水飲み場・四阿の中庭に腰を下ろして喉が渴いた旅人たちが水を飲んでいる、(c)住居の戸口から「庭に」撒かれたバリ供養(の食物)を見つけたカラスたちが嬉しげに次々に舞い下りている、(d)或る場所では食事の時刻ゆえに食器が洗われている、(e)また別の所では住居の内壁を塗る作業がいま進められており、(f)立ちのぼるアグニホートラ(火神への護摩)の煙の臭いがあたりに漂い、(g)別の或る所では

坐ったまま「欲しそうに」顔を上げてゐる犬が食事途中の牛飼いを見つめており、(h)また杵に打たれて搗き碎かれている途中の胡麻からはよい香りが流れ出て、(i)また或る場所では様々な食事を享けている最中である特別客の人々（施食を受ける婆羅門たち）がいる、或る一つの村に、正午近く、休息のために入ってゆきました。其処で、一人の酒売りの女がダンディカに言いました。「尊いお方、あなたに施食を差し上げますよ」と。そこでダンディカは彼らに言いました。

「この女性から作法に従い、私が施食を受け取っている間、お情けですから、どうかちよつと、ここで私を待って下さい。」〔iii・iii〕

◇そこで彼ら婆羅門と馬飼と大工は「縄から」彼をほいてやって、言いました。「ゆくがよい。施食を受け取ったら、すぐに戻って来いよ。」「はい」と彼は答え、その酒売り女が奥の部屋に「施食を取りに」入ってゆくと、その間に、彼は衣の布に覆われて寝椅子で眠っていた赤ん坊の上に「うっかり」坐ってしまいました。

その小さな赤子は体をその豚のような汚い体をした婆羅門の大きな水甕のような腹の重さに押し潰されて、体がねじれ関節が外れてしまつて、苦しげに泣き叫び、死んでしまいました。〔iii・iii〕

◇その時、「奥から」その若い女が飛びだして来て、ダンディカを「寝椅子から」立たせ、その嬰兒が死んでいるのを見ると、「ああ何てこと！お前にこの乳飲み子が殺されちゃった、ああ、私の小さな息子が」と叫び、さんざん泣き喚いてから、ダンディカを掴まえ、「来い！私らは裁きを受けるため王宮に行くのだ」と言いました。ダンディカは答えました。

「まずは今、あなたが考えていた施食を私にください。それから裁きのため、あなたと王宮に行くことにします。」〔iii・iii〕

◇ 若い女は喚きました。

「恥知らずめ！図体ばかりでかい婆羅門よ、私のあの小さな子を殺しておいて、泣いている私にまだ施食を求めのか！」〔三〇・二四〕

◇ そう言つて、彼女も彼をぐるぐる縛つてしまい、他の者たちと一緒に、鏡面王の宮殿へと出発しました。付き人たちを伴つた或る一人の高い家柄の女性が、父の家に行く途中でしたが、「路上で」ダンディカを認めました。そこで彼に、彼女は「和上、どこにいらっしゃるのですか」と尋ねました。ダンディカは答えました。

「高貴なご婦人、私は自分で行きたくて行くのではありません。運がなくて無力な私は、悪い心の人たちにより、無理やりに王宮に引つ張られてゆくのです。」〔三〇・二五〕

◇ すると彼らは彼に言いました。「へえなんと、罪の無い苦行者様が王宮に引つ張られてゆくんだとさ。」良家の女性と言いました。「和上、偉大な知恵をもつ鏡面王に、次のように尋ねていただけませんか。

私が夫の家に居る時、私のこの心はいつも父の家（実家）に強い思いを寄せています。それなのに、父の家に居る時は、私は激しい切望をもつて夫の家のことを思い続けてしまうのです。〔三〇・二六〕

こんな「矛盾する」願望がもう私の心を悩まさないようにする方法を、偉大な知性をもつかの王様こそはご存知に違いありません。」〔三〇・二七〕

◇ その後、(a)輝く金属の棒を思わせる青黒い皮膚をした、(b)二つの舌をちらちらと出す、一匹の蛇が蟻塚から出て来ると、ダンディカに言いました。「おお大婆羅門、どうか私が言う言葉どおりに、あなたから鏡面王に尋ねてくれないか。

どうして私は巢穴の外に出ると、怒り（忍辱の敵）が起こり、この心が火のようにかつかと燃えたがるのか。

また、どうしてそこ（巢穴）にいる時には、怒りが消え失せ、まるで三昧に専念した牟尼のように、心が安らかに鎮まるのか、と。」（三〇・二八）

◇ またその後、葦の茂みの中から一匹のティツティリ鳥（キジ科シャコ）が出て来て、言いました。「大婆羅門よ、私が言う言葉どおりに、あなたから鏡面王に尋ねてくれ。

ここの葦の茂みの中に居ると、私はとても強い自信を得られる。なのに、それ以外の所に居ると、どうして私は心乱れた〔不安な〕状態になるのか、と。」（三〇・二九）

◇ ダンディカは〔彼らに〕答えました。「もしこれらの人たちから私が解放された時は、この伝言をすべて王様に伝えます。」（二〇）

さて〔長い道を経て〕次第に彼らが進むうち、太陽が『日没山』（西の地平線にある山）の頂にかかりました。そこで彼らは皆、一本のニヤグローダ（バンヤン）の樹の下、草の茂みの所で野宿を営みました。そして夜半になり、彼らがすっかり寝入ってしまうと、ダンディカは次の様に考えました。「もしもどのようなかたちであれ〔終に〕彼らに裁判で負けてしまったとしたら、その後、『どんなやり方で罰を与えてやろうか』と書いている王の家来たちから私は責め苛まれ続けることになるだろうが、その大変な苦痛に私はとても耐えられやしない。いつそニヤグローダ樹に登って、自殺しよう。」

そう考えると、彼はなんとか拘束の縄をほどき、ニヤグローダ樹の上に登ると、自ら首を吊りました。

するとヴェーターラ鬼に似た〔大きな〕体をもった彼の過度の重量によって、その樹の枝がぼきりと音を立てて折れました。（三〇・三〇）

たちまち、巨体をもつその彼は、首に縄を付けたまま、〔下方に〕寝ていた叢林警備隊の長（³⁰）の真上に落下

しました。〔三〇・三二〕

片腕が折れてしまつて、その叢林警備隊長は恐怖のあまり混乱して立ち上がり、次の様に喚き叫んで、仲間たちを起こしました。〔三〇・三三〕

◇「あのニヤグローダ樹から落ちてきたビシャーチャ（食肉鬼）に、おれの腕は折られた。さあ、お前たちはランプを点ける。」するとその場にいた生まれつき臆病な者たちは「ビシャーチャ」と聞くと、たちまち四方八方に姿をくらましてしまいました。

他の者たちがランプを灯してみると、かの婆羅門が、落下した怪我の痛みで呻吟し、もがいているのを発見しました。それを眺めると、「悪心のお前のせいで、叢林警備隊長殿の腕が折れたのだ。だから、さあ、来い。王宮に行くぞ」と言い、夜が明ける時にその叢林を守る人たちは彼を他の者たちと一緒に、王宮へと連れてゆきました。

その後「王の」謁見の時間になると、ダンディカと共にそのすべての者たちは門衛によつて鏡面王の前に導かれました。〔三一〕

* その婆羅門はあまりの恐怖に、卒倒してしまいました。するとひたすら三界を益せんと努めているかの王（鏡面王）は、その彼を見て、憐れみの思いに心を濡らしました。〔三〇・三三〕

◇ * 彼ら（起訴者）の全員が順々にダンディカの罪科を述べ立てました。

* するとかの王は「内心」「こうしよう。——私は方便（救済の手立て）をもつてこの婆羅門を解き放つてやろう」と考えて、告げました。「どうしてお前たちは裁判を得ずして、この婆羅門を痛めつけ、縛りつけ、ひどく苦しませて連れてきたのか。それでは、お前たち全員も処罰せねばならぬ。」〔三二〕

* そう告げると、彼らは「もしそうなつてしまふなら、どうか、この婆羅門を解き放つて下さい」と答えました。彼らは処罰を恐れて彼を解放してやると、それぞれの所に戻ってゆきました。

* 歓喜の心を抱くそのダンディカは、祝福の言葉をもつて「王を」讃えましたが、その後、良家の女をはじめとするかの者たちより「預かつてきた」言葉を質問しました。するとかの王は聞いて、こう答えました。「その良家の女に、このように言つてあげなさい。

* 夫の家に行くと、父の家「に帰ること」をまた欲する理由は、他の男たち（結婚前に交際した男たち）への欲に焼かれて悩苦が生じるからです。このように揺れ動いて、火が炭に「執らわれ続ける」ように、あなたが他の男たちに執らわれた心をもつ限り、落ちつきを得ることはない。（三〇・三四）

* もし「揺れて苦しむ」心を治したいのなら、それらの者たちを心から遠ざけなさい。無益な妄念に迷わされてゐる人たちは誰も安らぎをもてないのです。（三〇・三五）

* また、蛇には「こう」伝えなさい。もしあなたが安らぎを欲するなら、何かの生き物に出会つても怒るべきではありません。（三〇・三六）

* 怒りの火を燃やす者、——その者は自分の心が燃えるばかりでなく、他人「の心」も焼いてゐるのです。迷妄の心をもつ者は、必ず地獄の燃える火のための薪になるでしょう。（三〇・三七）

◇ * また、ティッティリ鳥には次の様に言いなさい。

* 葦の茂みの下に宝があつて、そのおかげで、そこにいと、あなたにとても強い自信が生じるのだ、と。（三〇・三八）

◇ * 「婆羅門よ」、その宝を掘り出せば、あなたは貧乏の苦しみから解放され、幸せに家住の生活を守つてゆけ

るだろう。だから、もう立ち去つてよい。」

＊その時、ダンディカは格別の知力をもつその王の知性に驚嘆の思いを生じて、尋ねました。「大王様、あなた様にどんな誓願がおりになるのか、それをお話し下さいませんか。」——菩薩は答えました。

＊「無上の悟りを有し、寂滅を得ることを私は願っているのです——三界の「生存の」海に没しているこれらの生類を引き揚げ「救出する」ために。」〔三〇・三九〕

◇ダンディカは言いました。

＊「あなたが悟りを得て、無知の闇を断ち切られた時には、どうか〔私も弟子として〕あなた様からお教えを受けることができますように。」——彼（王）は同意の返事をしました。〔三〇・四〇〕

◇その後、そのバラモンは去つて、かの「王の」語ったことをそれらの「依頼した」者たちに報告した後、その宝を掘り出し、歓喜して、家族の人たちとともに富によつて貧乏の苦しみから解放されて、幸せに過ごしました。

＊さて「ある時」、或る大臣の長が「王たる」菩薩に対し幾度も、花を糸で結んだ花環の如き次のような讃歎の詩篇をもつて、深い敬意を表しました。「閣下が自性としておもちの、これほど偉大な知に、誰が驚嘆の思いを起さないでいられましょうか。」

＊山にある火は遠くからでも煙の推理によつて推測できます。この世界で推理する人が推理すべき対象領域をもつ時、推理の知性により推理可能な事実を見ることができます。凡人は疑わしきものに対して疑いを起すだけです、疑いを消し去る知性を有するあなた様のような方たちは、感覚器官を越えているものから、直接知覚を有するかのようです。〔三〇・四一〕

* 弱い心をもつこれら世の人々は、感覚器官〔の快楽〕に支配されています。それ故、智者たちはそれら（五感覚）を「インドリヤ（強力なもの）」と呼んで、支配します。あなた様はあらゆる知の対象の彼岸にまで到達しながら、感覚器官をよく支配しておられます。あなた様に対して何ら支配力（影響力）を持ち得ない「インドリヤ」とは〔あなた様にとって〕価値の低い知の対象をさす言葉なのです。（三〇・四二）

* インドラ神（ヴァジュラダラ）のおかげで天界がその様であるが如く、〔今や〕地上の国土（ヴァスンダラー）が最高の幸せを有するのは、輪廻的生存の断滅（涅槃）をめざすお心をもつあなた様のおかげです」と。（三〇・四三）

三

◇ — * さあ、このように、かの世尊（釈尊）が菩薩であった時、沢山の過患がある王権（王国）すらうまく守り運営することで、偉大な智者という性質により、困苦に陥った者たちをお救いになったのです。そのことをよく考えて、〔あなたたちは〕仏・世尊に対してひとすじに信心をもつ者としてあり続けなさい。

* 『鏡面王（アーダルシヤムカ）ジャータカ』、『第三部類の』第一〇話〔終わる〕。

〔比較資料〕クシェーメーンドラ作『菩薩アヴァダーナの祈願成就の蔓』

第二〇三章 プリヤピンダ・アヴァダーナ ③

幸福と祝祭の数々によって天界のような享楽に恵まれた、輝く真珠の首飾りや最上等の衣、冠・日傘・扠子が白く眩しく微笑む、栄耀のさまは、偉大な心の者たちがもつ善行〔の業果〕を示すものです。（二〇六・二）

かつて世尊は、「大きく高まった正法により富と偉大な力の発生がある」ということを教示して、「次の」教えを、驚く比丘たちにお説きになったのです。(二〇六・二)

或る別の生において、まだ無上の智慧(仏の悟り)という栄光に到達していなかった時でも、私は善行(「の果」を示す、驚くべき栄耀を所有していました。(二〇六・三)

ウッタラーパタ(北路)にあるヴァジュラヴァティーという名の都城に、金剛杵を持つ神(インドラ)の如き、ヴァジュラチャンダ(vajracanda)という名の王がいました⁽³⁴⁾。(二〇六・四)

彼は都城ガンガーディパティヤを治める王であるメールを「戦争で」打ち負かした後、ローヒニーという名のその王の娘を月の如き彼は得ました。まるで月が「最愛の月宿である」ローヒニーを得るように。(二〇六・五)

その王は彼女との間に太陽(ミトラ)の如き光輝をもつ息子をもうけました。誕生と同時に現れた、色とりどりの(citra)宝石の日傘を有するその子はすばらしく輝きました。(二〇六・六)

その王子がもつ福德の威力によつて、常に「彼が」心に願うだけで生じる神々しい装飾品と食べ物の享受を⁽³⁵⁾、都城の住民たちは得ました。(二〇六・七)

彼のおかげで、愛好される(ブリヤ)享受食たる握り飯(ピンダ)が都城に満ち溢れました。そのためその王子はブリヤピンダという名と呼ばれました。(二〇六・八)

父王の死後、彼が王権を得ると、あらゆる方角にその名声は拡がりました。彼は自身の願望のとおり、あらゆる生き物たちに、食べ物の享受の完全な達成を実現しました。(二〇六・九)

さて邪悪な思いをもつドウルマティという名の大臣は、彼をうとましく思っていました。なぜなら徳性ある者を憎むのが悪人たちの自性だからです。(二〇六・一〇)

その彼は、かの王（プリアピンダ）の母方の祖父であるメール王に幾本もの秘密の手紙を送り、昔の屈辱の記憶を呼び覚まさせ、戦争を欲する気持ちを起こさせました。（二〇六・二二）

忽然と湧き上がった激しい怒りを最も燃え立たせた彼（メール）は、怒濤の如き軍をもって、孫（娘の息子、プリアピンダ）を打ち滅ぼすことを望んで、使者たちを送り、「かく」通告しました。（二〇六・二三）

『孫よ、あなたは私の仇敵の息子だ。あなたの邪悪な父はわが勢力圏の環を大きく欠けたものにしてしまい、また『栄誉』（Kṛti）の女神の如きわが娘を奪い取った。（二〇六・二三）

その切り取られた領土を自発的に明け渡すがよい。もしそうしなければ、私が自ら進軍して、あなたを国の辺境地帯で庇護を求める客人（の身分）にしてやろう。（二〇六・二四）

母方の祖父からのこの通告を聞き、王は国民が大きな破壊に曝されることを憐れんで、彼らを安心させるために「軍を率いて国を」去りました。（二〇六・二五）

講和と戦争とを準備して、彼は幾多の船により夥しい数の兵を率いて川を渡り³⁶、ガンガーの川辺に位置する母方の祖父の都城に達しました。（二〇六・二六）

大臣や家臣たちの一団に伴われている彼が軽く心に思っただけで出現する天界の食べ物を目撃したため、メール王は「この者は神だ」と思って彼を尊敬し、自ら彼のもとに赴くと、涙を浮かべて抱擁し、あらゆる宝を奉じて深い敬意を示しました。（二〇六・二七―二八）

愛情深い態度をもってその王から恭しくもてなされた彼（プリアピンダ）は、自分の都城に戻ると、閻浮提（南瞻部洲）すべての人々を天の食事の出現によって歓ばせました。（二〇六・二九）

「その時の」富財の達成に関して、比丘たちは仏陀にその「前世の業の」行為を質問しました。すると一切智者

は彼らにその豊かさの原因をお語りになりました。(二〇六・二〇)

彼(仏)は別の生において、ヴァーラーナシーに住むムーリカという名の婆羅門でした。その彼は病気で衰弱した独覺(辟支仏)が健康状態を取り戻すまで、薬による治療を行い、また太陽の熱射の中で、色模様がきれいな(cīra)日傘をかざし続けました⁽³⁷⁾。その福徳によって「次世で」王たる日傘をもつ王となり、天の食事を享受する者になったのです。(二〇六・二二～二三)

私とそのプリヤピンダでした。デーヴァダッタが「大臣」ドウルマティでした。―以上のことを世尊がお説きになったのを聞き、比丘たちは驚きました。(二〇六・二三)

ああ、「菩薩が」富と権力と天界の如き享楽という幸せに恵まれて、この地上の世界を「王として」治められたことはじつに驚きであるが、そのことは、長く病を患って大変な窮状に陥っていた「独覺」を運び出し、救い出したことで「菩薩が得た」福徳によって現出したことなのである。(二〇六・二四)

―以上、クシエーマーメンドラ作『菩薩アヴァダーナの祈願成就の蔓』における「プリヤピンダ・アヴァダーナ」という第一〇三の小枝(章)。

【注】

(1) 蔵訳はデルゲ版(D)、北京版(O)、ナルタン版(Z)を絶えず参照した。ただしどの異読を用いて和訳したかはいちいち注に記さない。和訳を見ればわかると思う。

(2) この外蘭幸一(1993)の訳に基づいたŚākyasimhajāṭakaの梵文は二一〇の詩節を含むチャンプー体の独立した作品であり、Hahn(2007)による校訂梵文がある。それに対し、Straube(2019)が出したハリバッタの新しい校訂本の第三章 Sarvāthasiddhajāṭakaでは、Śākyasimhajāṭakaの梵文の中でハリバッタの蔵訳と合致する部分のみがハリバッタの真作と考えられているため、蔵訳に無

いか、一致していないその作品の梵文の後半部分は切り捨てられて、結果的に第五三詩節までしかない、ほぼ半分の長さになった梵文テキストとなっている。その前半のみになった *Sakyaśmājātaka* の「短いヴァージョン」である第三章は、馬鳴の *Buddhacarita* からの影響があまりに露骨に出ている作品である。しかし私がここで注意したいのは、この第三章の中にハリバッタが書いたとは思えない散文部分が見受けられる点である。それは具体的には 30+ の長い散文 (Strube 442-443) と 31+ の長い散文 (Strube 444) と 32+ の散文 (Strube 444-445) なのであるが、それらの散文 (外蘭訳の二三八―二四二頁) はそれまでのハリバッタの諸章と比べて、必要以上に銜学的で、自分の知る特殊な論書や注釈書の学識を誇示しようとする姿勢が見え、どうもハリバッタらしくないのである。彼の作品の第一―第三章までのジャータカでは、ハリバッタがそのような煩瑣な哲学的な文を長々と書くことはなかった。ジャータカの諸章において彼が短く語る仏教学的な説明はインド仏教の普通の在家信者でも知っている程度の常識的なものである。むしろハリバッタは自分という詩人が仏教聖典の教理に精通したアーリヤシューラの如くではないことを強く自覚しながら (本作品の『序』の第三詩節)、その点からの批判も覚悟して、仏教学よりも詩作を得意とする者の立場から、広く一般の人々によって歎ばれることを意識した新しいジャータカマラーの作成に入っただけである。その詩人が第三章の仏伝でなぜわざわざこのような学者的な文を書き始めたのか。大学者である馬鳴の *Buddhacarita* 第二章を意識するあまり、書き方を変えたのか。この異質性は作者が異なることに由来するのではないか。そもそも蔵訳に基づいて Strube によって構築された第三章の梵文も、そのすべての文がハリバッタの書いたものなのか、疑うことが出来よう。第三章は後代の詩人 *Gopadatta* が作ったのではないかと、Hahn (1986) の説もある。先行するアーリヤシューラの作品が三四章だったため、それを強く意識したハリバッタの作品も本来は三四章で完結していたと見てよく、第三五はなくてもよい余計な追加である。ハリバッタの蔵訳は一二世紀の後半に *Ishul kṛims byung gnas sba pa* (1107-1190) と *Alankādeva* (= *Alankādeva*) の二人によって作られたものであり、ハリバッタから七五〇年以上隔たった時代になされた翻訳である。その蔵訳が一二世紀にあった梵文テキストの形を伝える第三章 *Sarvārthasiddhājātaka* は内容的に仏教徒にとって最も気になるテーマである釈尊伝を扱うため、もしその章が元々はハリバッタに遡るものであったと仮定しても、彼の後の数百年の間に後代の仏教徒の手によって付加や再編集が梵文に施された可能性を疑ってもおかしくない。つまり、ネパールの仏教徒によって行われたようなその章への付加と改変の作業が、同じ様に一二世紀以前のインドでも蔵訳がなされる前の段階ですでに学者か詩人によりその章の中で局所的に行われた可能性を考慮する必要がある。こうして第三章の作者性については、多くの疑問が残る。

(3) 現時点で未訳のまま残されている四つの章とは、第一〇話 (Htaisin 蔵訳 *Phan dod*)、第一三話 (Rsi 蔵訳 *Drang strong*)、第一五話 (*Rsipañaka* 蔵訳 *Drang strong lnga*)、第一七話 (*Tapasa* 蔵訳 *Dka' thub pa*) である。――なお梵文が完全に欠けているため、蔵訳だけから全文を訳さねばならない諸章においては、私は第二一話 (タルダラ蛇) と第三一話 (隊商主スヤートラ) の、二つの章の和訳を第七回の論文で発表している。

(4) 第一八話プリヤビンダの話の、私が知る唯一のパラレルである *Ksemendra* の *Bodhisattvāvanakapālā* 第百三章のテキストを読むと、忍辱、もしくはそれに相当する言葉がどこにも出てこない。この戦争と平和の話はもともと忍辱を強調した話なのであるのか。このプリヤビンダ王の話は忍辱波羅蜜に属する話として作ることに決めて、むりに忍辱の話に仕立てたのはハリバッタなのかもしれない。ハリバッタはこの第一八話の標語として忍辱を強調し、第一詩節を次のように記す。「いかなる装飾品をもたなくても、その人を美しく飾るものが『忍辱』である。力としての揺るがぬ『忍辱』をもつ、智慧ある者は、たとえ武力があっても『忍辱』をなし、『忍辱』という力を追求する。」(蔵訳からの試訳)

(5) 第一六話 *Kāśisundara* のパラレル文献としては *Avadānśataka* の第七五話 *Kuvalaya* (蔵訳では *ut pa la*) があり、漢訳では『撰集百緣経』の七五「舞師の女、比丘尼と作るの縁」がそれに該当する。ハリバッタはその梵文作品か、それに近い有部系の伝承をソースとして利用したと思われる。この話は現在世の話(青蓮という舞女の出家)と過去世の話(若いスンダラ仙とキンナリー)から成るが、ハリバッタでは過去世の話のほうが中心で、その話が最初に置かれているのに対し、*Avadānśataka* では現在世の話のほうに重心があり、その後には過去世の話が置かれる。釈尊の世に舞師の娘であった青蓮 (*Kuvalaya*) という美貌の舞女が、竹林精舎で踊りを演じ、仏や僧たちに対して若さの驕慢を示したため、釈尊の神力により老婆の姿に変化した自分の姿を見せられ、改心して比丘尼になり阿羅漢果を得る。その青蓮の過去世の話として、彼女が菩薩(釈尊の前世)たるカーシスンダラ仙人を誘惑しようとしたキンナリーの娘であったことが語られる。――なお同名のカーシスンダラ(カーシの美しい人)が登場する有部系の話として *Kṣemendra* 作 *Bodhisattvāvanakapālā*, No. 30 (or 29), *Kāśisundarāvadāna* がある。この話は、ハリバッタの第一六話とは内容が全く異なる話なので、その話のパラレル文献の一つと見なすことは出来ない。後宮の女たちに慕われ囲まれているのを見て激しい嫉妬に駆られた王によって体の一部を次々に切断されても耐え抜くという忍辱を示した主人公の仙人は、忍辱論者(クシャーンティ・ヴァーディン *Kṣāntivādin* 忍辱を説く者)と呼ばれる。その話の多くのパラレル文献を見ると、もともと古い時代には主人公の仙人の固有の名前はいつでもよく、忍辱論者という呼び名だけが先に成立し、その呼び名があるだけでよかつ

たが、しかしいつ頃からか説一切有部では有部律の説話においてこの忍辱論者の仙人の名をカーシスンダラと見なすようになった。つまり、これら二つのカーシスンダラ仙の話は同一人物たる美貌のカーシスンダラ仙が別の時に遭遇した異なる出来事をそれぞれ語っている話と見なすことも出来なくはないので、有部ではそのように理解されていた可能性がある。その *Ksenendra* の第三十章(第二十九章)は *Stratke* (2010) によって梵文・蔵訳のテキスト校訂と独訳がなされた。その章は根本有部律『破僧事』にある同内容の話に基づいて作られたものと思われるが、その『破僧事』での話は梵文から平岡聡 (2024: 5-14) に訳された。なお *Ksenendra* は奇妙にも同じ作品中でこの忍辱仙人の話を二回作っており、第三十九章(第三十八章)はその短いヴァージョンである。ただしそちらの章にはカーシスンダラという固有名が出てこない点に注意する必要がある。それら二つの章の和訳として引田弘道・大羽恵美・山崎一穂 (二〇二二) がある。

(6) 第一六話の冒頭の所ではこの(b)の文まで梵文が欠けており、次の(c)の「世の人々に母の如く」で始まる文から梵文が有る。

(7) キンナリーが「何か他の口実を使つて」と考えた、その口実 (*apadesa*) とは、16+ の箇所では語られる彼への相談の内容であるが、実は彼女が語る、彼に恋い焦がれている女友達は存在しないのであろう。

(8) 第一六話で梵文が有るのは 28+ の「認識し」の箇所までであり、「語りました。」の箇所以降は蔵訳からの和訳となる。これ以降、章末まで梵文が失われている。

(9) この箇所では私が「年齢」と訳した蔵訳は *na bahod* であり、その語は梵語の *varas* を訳したものであろうが、その語を「若さという力、若い時期、青春」と訳すか、「年齢」と訳すかで文の意味が逆転する。「彼女が私より年齢が勝っている」と訳すと、「彼女は私より年上の人である」の意味になるので、すると次の文は、「他ならぬあなたにおいて今まさに私が見ている肉体とは別のように〔あなたを〕見る」ではなく、「……とは別のよう〔その女性を〕見る」と訳さねばならないが、そう訳したほうが、少し後に出てくる「そのキンナリーにおいては、まして、言うまでもありません」という言葉と、整合性が出る。

(10) 先の第一五詩節でそのキンナリーが語った言葉について言及する。

(11) *Avadamsasaka* の第七五話 *Kuvajaya* が、ハリバッタが本話のソースとして利用したその聖典であったかも知れない。その過去世物語の短い単純な記事を土台にして、詩人が細部を変えつつ話を膨らませて本話を成立させたことはありえると思う。

(12) 第一六話の第三三詩節が始まる直前に、文脈的に見て明らかに唐突なかたちで、後代の付加と思われる二詩節が記されている。梵文が欠けている箇所なので、チベット訳から訳すと次のとおりである。

「私（釈尊）は〔前世で〕カーシスタラという、誓戒を有する仙人であった。〔今世で〕仏の弟子衆に墮落を生じさせようとしたこの者たちは役者の娘たちであった。」〔付加詩節一〕

「かの美しい王に対しても、仏はこれらの〔教化の〕行為をなさった。香ばしいバター油を注がれると王は、その瞬間、都城の民衆や親族と一緒にそのバター油の器の中に居た。」〔付加詩節二〕

この二番目の付加詩節は文の意味がよくわからないし、話の典故も不明である。

- (13) 最後の第三六詩節はハリバッタの章末の定型文に従わない。この第一六話を締め括る、第三三詩節以降の韻文が連続する最後のパートは、付加であることが明白な二つの *anushtubh* 詩節を途中に含むことからわかるように、明らかに後代の人による再編集を受けたものであり、ハリバッタが書いた本来の形を失っている。

- (14) 第一八話 *Priyapinda* のパラレル文献として *Bodhisattvādanakapalaṭā*, No. 103, *Priyapindādana* がある。この *Ksemendra* 作の第百三章は *Straube* (2009) によって梵文・蔵訳のテキスト校訂と独訳がなされた。ハリバッタから約六百年後の十一世紀の *Ksemendra* のこのテキストがあるおかげで、本話の全体のストーリーが短く掴めるし、またハリバッタの第二四話薬師ムーリカの話が、本話のプリヤビンダ王の生の直前の前世の話であるという伝承がインドにあったこともわかる。プリヤビンダは前世で、薬師ムーリカとして、一人の衰弱した独覚（辟支仏）を救った善行の功德により、天の食物などをいつでも得る力を得たという (103, vv. 21-22)。ムーリカとプリヤビンダの二つの話は、源泉たる何らかの聖典において一緒に繋がって説かれていたのであろう。この *Ksemendra* の章は今回「比較資料」として本論文の最後に和訳を提示した。これ以外の本話のパラレル文献は不明である。

- (15) 第一八章の初めから梵文が欠損しているので、私は章の途中から訳を始めて、88-96+途中までの部分を蔵訳から訳した。「私も閣下の側につくつもりです」の文からは梵文があつて、章末まで梵文が続く。

- (16) 第二八話 *Padaka* のパラレル文献は今のところ不明である。

- (17) 「頼みました」と私が訳したこの箇所蔵訳の語 *śman gnyur e* は伝承の誤りと思われる。この箇所には「頼みました」か「言いました」にあたる動詞が来るはずと推測して、訳した。

- (18) 「女性の目を悩ます蜜蜂」という特殊な文学モチーフの例として、次の *Sākyasirijajātaka* 35.22 の文を参照せよ。 *madapṛtibhānam aśmāgatidvirepham durat kumāra vinivāraya tāvad eva* / 「私は、あなたのために〔花を摘むべく〕、細微なる蜜に充ちたる、これらの花に歩み寄らんとす。されば、わが視線を妨げて、音繁く飛び交う蜜蜂を、王子よ、遠くより、直ちに追い払いたまえ。」外蘭幸

一 (一九九三)、『一二三五頁の訳。

(19) 蔵訳の *skyes pha* (D: pa NO) を *skyes*sa* 「生まれた土地」と修正した。

(20) この難しい箇所蔵訳は *ya'd byung bas ni chos kyi* (D: kyi's NO) *sens dpa' rgyal ba ni // 'ong ste* であらう。

(21) この「羞恥しながらその娘は父に言いました」の文までを蔵訳から訳した。その次の文からは梵文があるので、梵文から訳す。

(22) 第二八話を締め括る最後の一文、「パダカは父から許可を得て、夫と息子との別離に苦しむ〔母の〕キンナリーをいたわって喜ばせ、連れて来ると、或る地で〔終生〕幸せを得ました」は、梵文写本には書かれてあるが、蔵訳にはその文が欠けている。この梵文と蔵訳の間の伝承の違いをどう見るかは、学者で意見が分かれると思われる。キンナリーが菩薩の父を愛するあまり、ずっと彼を洞窟に閉じ込めていたようだという観点から見れば、たしかに父が母と再び一緒に暮らすのを拒否して、別れたまま、という終わり方にするのも可能である。しかし話を読む限り、父は長年閉じ込められていたことをさほど気にしていないようであり、夫婦と息子が再び一緒に別の土地で暮らしたという終わり方のほうが聴き手にとって満足が得られるであろう。そのような家族全員のハッピーエンドという完結の仕方のほうが、話として完成度が高い。また第四三詩節で、他者に奉公し仕える勤め人としての生き方は苦しみが多く、避けるべきことをパダカは説いているが、その詩節での彼の主張から考えれば、パダカはその後、王に仕える勤め人としての特異な探偵（現代風にいえば特別捜査官）としての仕事を辞めて、或る地で幸せに暮らした、という形で話が終わることが望ましいといえる。そのため、この最後の一文が有ったほうが作品の落ちつきがよい。蔵訳のほうに文が欠けているからといって、単純に梵文の側で付加がなされたと見なすべきではない。

(23) 第三〇話 *Adarsamukha* 鏡面王の章は、蔵訳から判断して全四三詩節から成るが、梵文テキストは二十散文の途中から終り散文の途中までの部分しかない。つまり梵文写本の欠損により、梵文テキストが章の始めと終わりで失われており、章の中間部のみ梵文が存在する。Hahn (1973) はハリバッタの蔵訳を読む彼の研究の一連の論文の嚆矢として、第三〇話の鏡面王の蔵訳テキスト・独訳・並行話の比較研究・語彙を示した（梵文写本はこの時点では見つかったため蔵訳のみを用いた）。― 本話のバラレ文獻は① パーリ・ジャータカ No. 257 *Gāmanicandajātaka* (ガーマニチャンダ本生) PTS Jātaka, II, 297-310. ② 漢訳『賢愚経』、大正蔵 No. 202, 47c28-429c5. この漢訳から蔵訳が作られ、更に蔵訳からモンゴル語訳も作られた。漢訳では第五三話、蔵訳では第三九話である。『賢愚経』蔵訳のその章は Hahn の『古典チベット語教本』（初版 1971, Hamburg）で練習用の読み物として取り上げられ、改訂第七版の Hahn (1996) ではその蔵訳テキストが *Lesestück I* (S. 227-232) にある。その教科書の虎の巻で

である Hahn (2003) には独訳がある (S. 23-32)。最近出た Bialek (2022) の英語による教本でもその蔵訳テキストが練習用の読み物 (pp. 230-234) として使われている。蔵訳のその話はかつて Schiefner & Ralston (1882), pp. 29-36 にも英訳された。③ 根本有部律の薬事にある鏡面王説話。梵文と蔵訳があり、ギルギット梵文写本の薬事における本話は *Nalinaksha Dutt* (1947), 115-122 と S. Bagchi (1967), 71.14-76.2 にあり、また薬事の本話の梵文からの和訳は八尾史 (2013), 339-334 にある。④ *Kṣemendra* 作 *Boḍhisattvāvadānakapalaṭā*, No. 17 (or 18), *Ādarsamukhāvadāna*, 7 の章は M. Straube (2009) によって梵文と蔵訳のテキスト校訂と独訳がなされた。なお *Ādarsamukha* 王が登場するジャータカ二五七話の『ジャータカ全集』第三巻の訳註 (pp. 384-385) には、特にインドで民間に口承で伝承された本話の類似話についての詳しい情報がある。このほか、上記の文献とは無関係に、鏡面王が有名な「群盲撫象」の喩を説く話として、支謙の『佛說義足經』卷上第五「鏡面王經」T4.178a-178c と『六度集經』第八九 T3.50c-51a (その漢訳の文は先の支謙の經と借用の關係にある) と『長阿含經』の「世記經」T1.128c-129a がある。また「世記經」の異訳である『大樓炭經』T1.289c や『起世經』T1.335b『起世因本經』T1.390a にもその王の名が出る (ただし『大樓炭經』では王の名が不現面と訳されているが、恐らく *ādarsa* を *a-darsa* と読んだのであろう)。これは後代になって、その喩を語る時に、登場する智慧ある王に元々固有の名前が無かったため、法藏部などいくつかの部派では鏡面王の名を借りてきて使うようになったことを示すものであろう。― この婆羅門ダンディカ (或いはダンディン) の話は、漢訳『賢愚經』第五三話と根本有部律『薬事』の記事によって一般によく知られている説話である。ハリバッタはこの話を何らかの聖典的伝承をソースとして作ったはずであるが、そのソースとなった伝承は『薬事』や『賢愚經』の記事とは異なるものであったように思われる。婆羅門が逃走を企てて、堀から飛び降りたために職工が死んだエピソードが『薬事』『賢愚經』にはあって、ハリバッタには欠けており、他方、婆羅門が自殺を企てて失敗し落下して、森の見張りたちの長 (*gulinakadhīpa*) の片腕を折ったエピソードはハリバッタだけに存在するが、この異なる二つのエピソードは本来は同一のものであったろう。そう考えられる理由は、本話のパラレル文献たるパーリ・ジャータカ二五七話にある。その話ではガーマニチャンダ (ダンディカにあたる人物) が「死んだ方がましだ」と思い自殺を企てて崖から落下したため籠作りの職工が死ぬという出来事が語られるのである (II, p. 302)。そのジャータカの伝承はちょうど、前述の異なる二つのエピソードの伝承の中間に位置するような形であり、両伝承の間のミッシング・リンクになっていることがわかる。Hahn (1973) はパーリ文ジャータカの二五七話と『薬事』と『賢愚經』とハリバッタという四つの文献の記述を比較して相違を示すが (S. 51-57)、その論考で Hahn 博士がハリバッタの話を根本有部律『薬事』から派生したかのように示している諸伝承の系

統図 (s. 52) に私は賛成できない。ダンディカが自殺を試みたため森の見張りたちの長が片腕を折ったエピソードは、前述の如く、現存する『葉事』だけでは説明できないからである。『葉事』では自殺という婆羅門の動機がどこにも語られていないことに注意する必要がある。Hahn 博士は、自殺未遂という劇的なクライマックスを作るため、職工よりも森の見張り人のほうが場所的に自殺に適しているという理由から、ハリバッタが職工から森の見張り人へと故意に変更したと推測する (s. 52)。ジャータカ二五六話の伝承が逃走のためではなく自殺未遂によつて結果的に籠作りを殺してしまったことを語っている点を重視すると、Hahn 博士のように現存する『葉事』の話だけを出発点としてハリバッタの作話を説明しようとする見方に私は同意できないが、ただ、ハリバッタが話を面白くするため、聖典のエピソードの順番を変えて、自殺未遂のエピソードを最後に移動させ、被害者を森の見張り人に変えたという点については、博士の推測の通りに、素材の自由な変更として扱うべきかもしれない。

- (24) 話の最初にある、王に即位するための資格確認としての王子の試験のエピソードは、『賢愚経』の話には全く欠けている。『賢愚経』にそれが欠けているわけは、代わりにダンディカの後世の、婆羅門の今生の話を置いているからである。鏡面が偉大な智慧をもつ王になる印象を読者に強く与えるその試験エピソードは、ハリバッタの話と『葉事』の間が相互にとっても近い伝承関係にあることが確認できる。ジャータカ二五七話ではそのエピソードは大きく内容を異にし、試験の競争相手となる兄の王子たちがおらず、鏡面王子に三回異なる人間の服装や飾りを着せられた猿が示される。これでは王になる資格試験といっても、子供の鏡面が王になるには早すぎないことを確かめる幼稚なテストでしかない。

- (25) この第二詩節の謎の詩で、私が「樹と石の根元」と訳した所の原文は *shing dang ri bo mans kyir tsar* であつて、もしその原文をその通りに素直に「樹と山々の根元に」と訳した場合、「山々の根元 (ふもと)」では宝を探すべき場所の範囲があまりに広くなりすぎてしまい、発見が不可能になる。隠された宝の位置は王宮のどこかの場所に限定されるはずであるから、私は藏訳の *bo mans* は梵語の *śāla* の訳語ではないかと推測し、「樹と山々」ではなく「樹と石」と解釈した。*śāla* には「山」のほかに「岩石」の意味がある。この後にある次の散文で、「樹と石の根元」という謎めいた言葉は、「マンゴー樹の根元と、獅子座 (玉座) の下」という意味であつたことが明らかにになる。なおここでハリバッタが基づいた聖典資料は根本有律律の伝承とどうやら違つていたらしく、ハリバッタの宝の位置に関する記述は、現存する梵文 *Mūlasaśvīdāvanaya* (MSV) が伝える次の文と太字の箇所が合わないことに注意する必要がある。『中にある宝、外に宝、内と外にある宝、木のてっぺんにある宝、山の頂上にある宝、水辺にある宝』 (*antaniidhi bahiniidhi antabahiniidhi vīkṣagṛe nidhi parvātāgṛe nidhi udakānte nidhi*; MSV 71.26f; 72.7f)。——なむ、パー

リ・ジャータカ五三九話のマハージャナカ *Maṭṭhanaka* 本生でも、王の遺した財宝の隠し場所が、謎の詩によって示される。その詩に語られる十六の財宝は、例えば三番目から五番目が「内の財宝、外の財宝、内でも外でもない財宝 (*anto nidhi, bahi nidhi, na anto na bahi nidhi*)」であり、鏡面王の話にある謎の遺言と共通する点が多い。Jataka, PTS ed., Vol. 6, pp. 37-38, vv. 11-13 (131-133). 安藤嘉則訳「マハージャナカ前生物語」『ジャータカ全集』9 三九頁。この謎の遺言というモチーフはバーリ・ジャータカのほかにもあり、クシヤ王説話を語る三つの梵語の説話文献たる *Mahāvastu* (ed. Senart, ii, 436-439), *Bhadrakalpavādāna* (*Kuśāsūdanā-parvata* 259a1-2), *Vṛakuśāvādāna* (7b2-4) でも、父のイクシユヴァーク王が隠された財宝の場所を王子たちに示す謎の遺言のエピソードが出てくる。Cf. Chopra (1966), pp. 74-77; Hahn (1973), S. 52-53.

- (26) 根本有部律『業事』でのダンディンという名前が、ハリバッタの話ではダンディカになっているという、気になる相違点は、それがハリバッタがもつ別のソースに由来するものなのか、それとも詩人が詩作の上で施した小さな工夫なのか、判断が難しいが、しかし『賢愚経』第五三話の「檀膩鞞」の名はダンディカの音写であろうことを考慮する必要がある。その名をハリバッタの作品からの影響と説明する立場もありえるので、悩ましう。

- (27) 私が「血管の網」と訳した蔵訳 *tsai dra ba mams* を、Hahn (1973, S. 73) は「草の網」(*ein Geflecht von Gräsern*)の意味に取る。
 (28) 「……馬を止めてくれ！」までの文は梵文の欠損のため、蔵訳から訳した。次の文、「そこでダンディカは……」以下は梵文から訳す。

- (29) ダンディカは王宮への旅の途中で様々な生き物たちから鏡面王への質問の伝言を依頼されるが、その伝言の依頼の数がハリバッタでは三件（嫁いだ良家の女・蛇・ティッティリ鳥）、漢訳『賢愚経』でも三件（雉・蛇・嫁いだ女）である。『業事』では六件（カラス・鹿・蛇・ティッティリ鳥・マングースと蛇・嫁いだ女）であり、ジャータカ二五七話では十件（村長・娼婦・嫁いだ女・蛇・鹿・ティッティリ鳥・樹神・竜王・苦行者・婆羅門青年）である。これを見ると、ハリバッタの三件は『業事』の六件よりも数が少なくなっているが、ティッティリ鳥の質問は宝の発見に必要であり、嫁いだ女と蛇による二つの質問は、それぞれ道徳的な指示を加えることが出来るため、ハリバッタにより、六件の中からその三件が選ばれたと Hahn (1973, S. 55) は推測する。

- (30) 私が「叢林警備隊の長」と訳した原語は *gumakadhipa* で、「叢林を守る番人の長、森の見張りたちの長」の意味であろう。 *gumaka* は *gūma* 「茂み、叢林」に指小辞 *-ka* がついた語で、*adhīpa* は「長、支配人」の意味である。この複合語を蔵訳は *geḷ ba'i bhaḡ po*

- (30) 〔義の支配者〕と訳し、その蔵訳を Halm 博士は Waldauscher (森の見張り番) や Walduiter (森林の守り、森番) と訳した。gulma は「兵士たちの一部隊」も意味するので、gulmakadhipa は「軍の小隊長の長、小隊長」の意味ではないかという疑いも生じるが、しかし 33+ に gulmaka-raksin「叢林 (森) を守る人たち」という語が出てくるため、「軍の小隊長」の意味ではないとわかる。叢林を守るというのは、森林火事を警戒しているのではあろうか。
- (31) ここ (33+) まで梵文があるが、第三詩節からは梵文が章末まで欠損しているため、「その婆羅門は……」以後は、蔵訳から訳す。
- (32) 『賢愚経』「葉事」とジャータカの裁判の場面の記述では、鏡面王は四人の告発者 (牛の所有者たる婆羅門・馬飼・大工・嬰兒の母親) のそれぞれの申立に対して別々に裁きを下す。王は告訴を取り下げさせるために一件一件、どの申立に対しても被告と告訴人の両方を同時に罰するような判決を下してゆく。たとえば牛の告訴では「ダンディンの舌を切れ。また牛の所有者たる婆羅門も、牛を見た時すぐに繋がなかったのであるから、目を振り出せ」など。しかしハリバッタでは、鏡面王が告訴者全員の申立を一纏めにして却下してしまう。その却下の理由として王は、被告を法廷に連れてくる前に不当に虐待して苦しめたということとを語る。ここに見られる話の大きな相違は、恐らくハリバッタの用いたソースに由来するものではなく、むしろ彼が創作に於いて戯曲のように自由に素材を扱っていることから生じたものであると思われる。ハリバッタは話の筋を変更し、王が全員まとめて裁きを下して告訴を取り下げさせることで、それらの個々の申立に対する判決の細かな記述に踏み込んで多くの詩節を費やすことを避けたと思われる。詩作上の都合からこのように話のソース (仏教聖典) にあった細部を大胆に変更することは、アーリヤシュラであれば避けたであろうが、芸術詩としての話の完成度にこだわるハリバッタはそれを気にしなかったであろう。
- (33) この Ksemendra 作 Bodhisattvādanakapalaṭā 第一〇三章の和訳は、Straupe (2009, pp. 196-201) の梵文と蔵訳の校訂テキストに依って訳した。ただし Straupe 博士が見ていないアーブン寺貝葉 C1、C2 を見て修正した箇所 (7c) もある。
- (34) ヴァジュラチャンダ (vajracanda, 蔵訳 rdo rje gñun po) という王の名は、ハリバッタにあるヴァジュラタンダ (蔵訳 rdo rje dbyug pa can = vajradanda) という名と伝承が異なる。
- (35) 103.7c の箇所ではアーブン寺貝葉 C2 は divyābharanabhogānubhogo と訳し (199a3) 、C1 写本も divyābharanabhogānubhogo と読める (276a6, 写本画像はひどく不鮮明)。Straupe (2009) に于けば、ネパール写本 A は最初に記された読み (aa) が divyābharanabhogānubhogo であり、写字生が後から修正した読み (p.c) が divyābharanavastānabhogo である。しかし (aa) は bhoga の言葉遊びがあるアーブ

ン寺写本の古い読みの方が良い。蔵訳もその古い読みを支持する。そこで私は Straube 校訂本の *divyābharanavastṛāmabhogo* 「神々しい装飾品と衣服と食べ物物の享受」の読みに従わず、C1, C2, A (a.c) の読みに従って、「神々しい装飾品と食べ物 (bhoga) の享受 (amabhoga) を」と訳す。

- (36) 103.16b の箇所では C1, C2 は *dūra-sainika* の読みを示すが、私は Straube (2009) の *bhūri-sainika* の読みに従った。C1, C2 写本で *dū* と *bhū* の文字は酷似する。

- (37) 先の第六詩節 (103.6) のプリペンダの誕生の場面に、「色とりどりの宝石の日傘」(*citraṃ manichhatraṃ*) といい、*ハ*とて呼応する表現があり、*citra* という共通の形容詞によって、業の連繫を示している。この第三詩節の内容に関連して、ハリバッタの第二四話ムーリカの二四詩節は次のように語る。「太陽の熱射を和らげるため、彼はパラシヤ樹の葉から大きな日傘を作って、独覺の上に差し掛けました。」

参考文献

- Bagchi, S. (1967): *Mūlasarvāstivādaśāstraśāstra*, Vol. 1, Buddhist Sanskrit Texts No. 16, Darbhanga.
- Bialek, Joanna (2022): *A Textbook in Classical Tibetan*, London/New York, Routledge.
- Chopra, Tiliak Raj (1966): *The Kuśa-Jātaka. A Critical and Comparative Study*, Hamburg.
- Dutt, Nalinaksha (1947): *Gileti Manuscripts*, Vol. 3, Part 1, Srinagar. [Reprint, Delhi, Sri Sanguru Publications, 1984.]
- Hahn, Michael (1973): "Die Haribhātājātakamāla (I). Das Ādarsamukhajātika", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, Band XVII (1973), S. 49-88.
- (1985): "Notes on the Śākyaśimhajātika", *Berliner Indologische Studien* 1 (1985), pp. 1-10.
- (1996): *Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache*, 7., korrig. Auflage. Swistal-Odendorf: Indica et Tibetica, Band 10.
- (2003): *Schlüssel zum Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache und Beiträge zur tibetischen Wortkunde. Miscellanea epymologica tibetica I - VI*. Marburg: Indica et Tibetica, Band 10a.

- (2007): *Haribhaja in Nepal, Ten Legends from His Jatakamāla and the Anonymous Śākyasimhajātika*, Studia Philologica Buddhica Monograph Series XXII, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.
- Schiefner & Ralston (1882): *Tibetan Tales derived from Indian Sources. Tr. from the Tibetan of the Kalgyur*, by F. A. von Schiefner and from the German into English by W. R. S. Ralston, London.
- Straube, Martin (2009): *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā: Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhajas Jatakamāla*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- (2010): "Aus Ksemendras Bodhisattvāvadānakalpalatā: Das Kāśisundarāvadāna (Nr. 29)", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Vol. 160, No. 1, pp. 89-120.
- 引田弘道・大羽恵美・山崎穂 (二〇三二) : 『菩薩伝の如意の華鬘 : ポーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター 第二十七章〜三八章和訳』、あるむ (二〇一八〜二〇二〇年度科学研究費成果刊行物、研究代表者引田弘道)。
- 引田弘道・大羽恵美 (二〇二八) : 『カーシスンダラ物語 : 『ポーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター』 第29章和訳』 『人間文化 : 愛知学院大学人間文化研究所紀要』 三三三号、九五〜一一八頁。
- 平岡聡 (二〇二四) : 『ブッタの奇しき事跡』、下巻、法蔵館。
- 外園幸一 (一九九三) : 『シャークヤシンハジャータカ』の和訳研究、『地域総合研究』一九巻、一二五〜二六〇頁。
- 八尾史 (二〇三二) : 『根本説一切有部律藥事』、連合出版。

※本研究は JSPS 科研費 (21H00470) の助成を受けたものである。

創立百周年記念論文集

上卷

九州大学文学部

目次

上巻

序

ハリバッタ・ジャータカマラー研究（八）

—— 第一六、一八、二八、三〇話の和訳 —— 岡野 潔……一

鈴木大拙の『禪と日本文化』—— 三段階の推移 横田 理博……三

心は「理」か「気」か

—— 朝鮮朱子学に見られる「心説論争」をめぐって 藤井 倫明……三九

日本古代の灌仏会とアジア 内田 敦士……三三

戦国期における妙心寺派と南九州 顧 明源……二八

目加田誠『中国旅行日記（一九四二年）』翻刻注（中）

—— 十月二十八日～十一月十四日 静 永 健・稲 森 雅子……三七

「第三帝国」以前の「第三の国」

——ドイツと日本におけるネオ・ヨアキム主義——

小黒 康 正……二五

屎尿処理問題からみた近代の都市と農村……

遠城 明 雄……三九

下 卷

チーム推論の理論——社会存在論の観点から——

倉 田 剛……1

Tantravārtika ad 3.1.1 和訳……

片 岡 啓……31

朝鮮時代の洛東江上流流域における淡水魚の採捕

——17世紀の礼安士族を中心に——

森 平 雅 彦……69

古墳時代後期における大型横穴式石室の築造工程

——八女市・乗場古墳と童男山1号墳の比較から——

辻 田 淳 一 郎……131

14世紀バレンシア王国北部における

村落自治と領主援助金(上)……

足 立 孝……159

【原典翻訳】 ズイヤ・ギョカルプ 著

『トルコ化、イスラム化、近代化』 翻訳（下）

.....（監訳）小笠原弘幸、伊藤寛了

【研究ノート】 明代武臣による著作・刊本（表） 井口 千雪 179
 （訳・訳注）岩元恕文、松倉宏真、松本和希、勝本英明、岩倉一澄...

On the scope paradox of negation in Japanese NISHIOKA Nobuaki 235

『嵐が丘』におけるアウトサイダーとしてのヒースクリフと野獣性

—— 動物表象とフェミニズムに関わる一考察 —— 鵜飼 信 光 287

VP-Preposing and Light-Verb Stranding Ellipsis are VP Control in Japanese

..... MAEDA Masako and SAKAMOTO Yuta 303

『パルムの僧院』の余白に

—— スタンダールとバルザックの出会いをめぐって —— 高 木 信 宏 321

Duras face à Aragon et Vercors :

prendre conscience du Génocide dans la France occupée MIYAZAKI Kaiko 385

進化経済地理学による経済地理学と観光研究の経路融合 外 柁 保 大 介 451

非接触式の触覚——心理学実験とベイズ推定による理解—— 光 藤 宏 行 475

内からの記述……………	飯	嶋	秀	治…	485
地域特性に対応した地域福祉計画による地域共生社会形成の課題					
——過疎内包型地域圏における地域集団活動の実態から——……………	高	野	和	良…	495
ChatGPTを用いた哲学・倫理学文献の機械的分類の見通し……………	土	持	貴	志…	509

執 筆 者 一 覧

(氏名)	(研究室等)
倉田 剛	哲学・哲学史
岡野 潔	インド哲学史
片岡 啓	インド哲学史
横田 理博	倫理学
藤井 倫明	中国哲学史
内田 敦士	日本史学
森平 雅彦	朝鮮史学
辻田淳一郎	考古学
足立 孝	西洋史学
小笠原弘幸	イスラム文明史学
顧 明源	人文科学研究院歴史学部門
静永 健	中国文学
井口 千雪	中国文学
西岡 宣明	英語学・英文学
鵜飼 信光	英語学・英文学
前田 雅子	英語学・英文学
小黒 康正	独文学
高木 信宏	仏文学
宮崎 海子	仏文学
遠城 明雄	地理学
外戸保大介	基幹教育院
光藤 宏行	心理学
飯嶋 秀治	比較宗教学
高野 和良	社会学・地域福祉社会学
土持 貴志	人文情報連係学府

創立百周年記念論文集 上巻

令和 7 年（2025）3 月 31 日 発行

編 輯 九州大学文学部 紀要・叢書・図書委員会

発 行 九州大学文学部
福岡市西区元岡 744 九州大学文学部

印 刷 城島印刷株式会社
製 本

福岡県福岡市中央区白金 2 丁目 9 番 6 号

哲學年報

第 八 十 四 輯

令和七年三月 発行

目 次

ハリバッタ・ジャータカマラー研究(八) ——第一六、一八、二八、三〇話の和訳——	岡野 潔……………(一)
心は「理」か「気」か ——朝鮮朱子学に見られる「心説論争」をめぐって	藤井 倫明……………(六三)
鈴木大拙の『禅と日本文化』——三段階の推移	横田 理博……………(八七)
ChatGPTを用いた哲学・倫理学文献の機械的分類の見通し	土持 貴志……………(七九)
集会的志向性の理論——その概要と課題	倉田 剛……………(三九)
<i>Tantravārttika</i> ad 3.1.1 和訳	片岡 啓……………(一)

九州大学大学院人文科学研究院

TETSUGAKU NEMPO

ANNUAL OF PHILOSOPHY

No. 84

March 2025

CONTENTS

OKANO Kiyoshi: A Study of <i>Haribhaṭṭa's Jātakamālā</i> (8) —A Japanese Translation of Chaps. 16, 18, 28, 30—	……………(1)
FUJII Michiaki: Is the Mind “Ri” or “Qi”: The “Mind Theory Controversy” in the Korean Neo-Confucianism	……………(63)
YOKOTA Michihiro: A Study on <i>Zen and Japanese Culture</i> by Daisetz Teitaro Suzuki	……………(87)
TSUCHIMOCCHI Takashi: The Prospects of Automated Classification of Philosophical and Ethical Literature Using ChatGPT	……………(79)
KURATA Tsuyoshi: Theories of Collective Intentionality —An Overview and Issues	……………(39)
KATAOKA Kei: A Japanese Translation of <i>Tantravārttika</i> ad 3.1.1	……………(1)

Published by
FACULTY OF HUMANITIES
KYUSHU UNIVERSITY

Fukuoka, Japan

哲
学
年
報

第
八
十
四
輯

九
州
大
学